

## [016]報告

大神, 智春  
九州大学留学生センター : 准教授

吉川, 裕子  
九州大学留学生センター : 准教授

清水, 百合  
九州大学留学生センター : 教授

鹿島, 英一  
九州大学留学生センター : 教授

他

<https://doi.org/10.15017/4777929>

---

出版情報 : 九州大学留学生センター紀要. 16, pp.63-140, 2008-03. 九州大学留学生センター  
バージョン :  
権利関係 :

## 九州大学留学生のための日本語コース (JLC)

大神智春\*

### 1. コースの概要

平成17年度(2005年)秋学期より全学補講(JLC; Japanese Language Course)を改編し総合・漢字・会話・読解・作文の5種類のコースを開講してきたが、平成18年度秋学期からは専門(学部の教員による授業)コースを開講し、更に学習者の多様なニーズに対応できるようにした。また、伊都キャンパスでの初級日本語コースも開講した。

#### 1-1 コース編成

当センターでは受講者数の増加とともに年々日本語授業に対するニーズも多様化している。今年度は、上で述べたように、日本語の授業と学部での講義の橋渡しの内容である「専門コース」を開講した。また、初級レベルの学習者に対してもより多様な開講クラスを設け、どのレベルの学習者も各々のニーズに合ったクラスが受講できるようになった。コース編成は表1の通りである。

表1 JLCのコース編成

	総合	漢字	会話	読解	作文	専門
入門	J-1(4)					
初級1	J-2(4)	K-2(2)	S-2(2)			
初級2	J-3(4)	K-3(2)	S-3(2)			
中級入門	J-4(4)	K-4(2)	S-4(2)			
中級1	J-5(2)	K-5(2)	S-5(2)	R-5/6(2)	W-5/6(2)	
中級2	J-6(2)	K-6(2)	S-6(2)			
上級入門	J-7(1)	K-7(2)	S-7(2)	R-7/8(2)	W-7/8(2)	
上級	J-8(1)	K-8(2)				

( )内は1週間の授業回数

#### 1-2 教材

平成18年度(2006年)に使用したテキストや教材を表2にまとめる。これらの主教材の他に適宜副教材を用いている。

\*九州大学留学生センター准教授。

表2 各クラスの使用教材

総合	使用教材	漢字	使用教材
J-1	『Total Japanese』	K-2	『Basic Kanji Book vol.1』
J-2		K-3	
J-3		K-4	『Basic Kanji Book vol.1, 2』
J-4	『J.Bridge』	K-5	『Basic Kanji Book vol.2』
J-5	『日本語中級 J301』	K-6	
J-6	『文化中級』	K-7	『Intermediate Kanji Book vol.1』
J-7	自主作成教材を使用	K-8	『Intermediate Kanji Book vol.2』
J-8	自主作成教材を使用	読解	使用教材
会話	使用教材	R-5/6	『大学生と留学生のための論文ワークブック 読解編』
S-2	自主作成教材を使用	R-7/8	『大学生と留学生のための論文ワークブック 論文編』
S-3		作文	使用教材
S-4		W-5/6	『大学生と留学生のための論文ワークブック 作文編』
S-5		W-7/8	『大学生と留学生のための論文ワークブック 論文作成編』
S-6			
S-7			

### 1-3 開講スケジュール

当センターでは、平成15年度（2003年）以降、各学期5週間の5期制を導入している。第1期・第2期は春学期に、第3期・第4期・第5期は秋学期に当たる。5期制を設けることにより、遅く来日した学習者も数週間待つだけで次の学期からコースに参加できるようになっている。平成18年度の開講スケジュールは表3のとおりである。

表3 JLCの開講スケジュール

	学期	開講期間
春学期	第1期	平成18年4月13日～5月24日
	第2期	平成18年5月29日～6月30日
秋学期	第3期	平成18年10月13日～11月16日
	第4期	平成18年11月20日～12月22日
	第5期	平成19年1月11日～2月14日

### 1-4 受講申し込みオンラインシステム

平成17年度（2005年）秋学期に導入したオンライン受講申し込みシステムの普及に努め、新機能を設けることで受講申し込み手続きの簡略化を図った。平成18年度に設けた主な新機能は以下である。

#### 1) メール送信機能

システムを通して学習者にメールを送信することができる機能を設けた。学習者個人、クラスの受講者、該当学期に受講登録をした学習者、ある学部に所属する学習者、などのカテゴリー

の中からメールを送信したい学習者（あるいは学習者群）を選び、それらの学習者向けにメールを送信する機能である。この機能により学習者への連絡が容易になり、クラス運営の効率化を図ることができるようになった。

## 2) 受講証明書作成機能

入試シーズンになると学習者から受講証明書を求められることが多いことから、受講証明書作成機能を設けた。

### 1 - 5 プレースメントテスト

プレースメントテストは従来は各学期ごとに1度のみ実施していた。しかし、秋学期はプレースメントテストを受験する留学生が多いことから、平成18年度（2006年）の秋学期はプレースメントテストを2回実施することとした。テストの種類は、総合テスト（文法・聴解・読解）、漢字テストおよびインタビューテストである。総合テストは新規の学習者全員が受験し、漢字テストおよびインタビューテストは技能別コースを受講したい学習者のみ受験することになっている。

## 2. 受講者数および受講者の内訳

### 2 - 1 受講者数

図1に平成12年度（2000年）以降の学習者数の推移をまとめる。受講登録者数はゆるやかに増加しているが、延べ受講者数は大幅な増加の見られた平成17年度秋学期を更に150名ほど上回る数となった。

平成17年度からコースの種類が増え、1人の学習者が複数のクラスを受講するというパターンが定着してきたのではないかと考えられる。

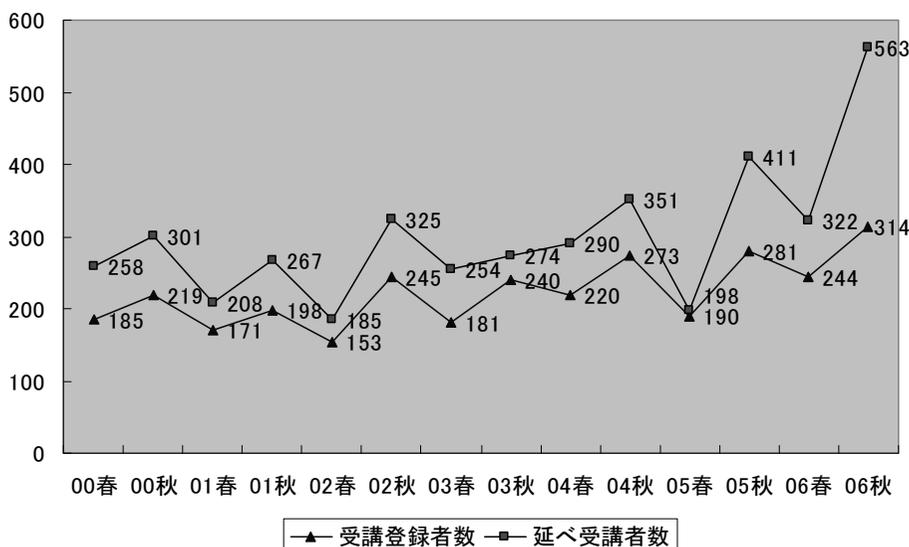


図1 JLC 受講者数の推移

2 - 2 受講者の内訳<sup>1</sup>

下に受講者の所属（表4）、身分（表5）、受講暦（表6）、出身地域（表7）をまとめる。

表4 受講者の内訳（所属別）

所 属	秋学期		春学期		所 属	秋学期		春学期	
	人数	%	人数	%		人数	%	人数	%
留学生センター	66	21.0%	51	20.9%	生物資源環境科学府・農学部	45	14.3%	27	11.1%
システム情報科学府	11	3.5%	17	7.0%	人間環境学府	15	4.8%	12	4.9%
システム生命科学府	3	1.0%	1	0.4%	人文科学府・文学部	17	5.4%	14	5.7%
総合理工学府	3	1.0%	2	0.8%	比較社会文化学府	14	4.5%	10	4.1%
工学府・工学部	28	8.9%	26	10.7%	法学府・法学部	43	13.7%	34	13.9%
医学系学府・医学部	8	2.5%	9	3.7%	経済学府・経済学部	21	6.7%	10	4.1%
歯学府・歯学部	6	1.9%	4	1.6%	芸術工学府・芸術工学部	13	4.1%	13	5.3%
薬学部	1	0.3%	0	0.0%	教育学部	2	0.6%	2	0.8%
数理学府	2	0.6%	2	0.8%	その他	7	2.2%	6	2.5%
理学府・理学部	9	2.9%	4	1.6%	計	314	100.0%	244	100.0%

表5 受講者の内訳（身分別）

	春 学 期		秋 学 期	
	人 数	%	人 数	%
研究生	14	5.7%	91	29.0%
学部生	71	29.1%	12	3.8%
大学院生	52	21.3%	52	16.6%
教官・訪問研究員	15	6.1%	21	6.7%
その他	92	37.7%	138	43.9%
不明	0	0.0%	0	0.0%
計	244	100.0%	314	100.0%

表4から留学生センターに所属する学習者が20%余りあり、全体の5分の1を占めていることが分かる。Japan as Today's World (JTW プログラム) の留学生（平成18年度は46名）や日本語日本文化研修プログラム（日研生）の留学生（平成18年度は21名）が年々増加していることが影響しているためであろう。

学習者の身分（表5）は、春学期は学部生（交換留学生）が多いが、秋学期は研究生や大学院生が受講者の大部分を占めている。

受講暦（表6）については、春学期・秋学期ともに新規の受講者数が継続受講者数を上回る。特に秋学期は全体の7割が新規受講者である。先に述べた留学生センター所属のJTWプログラム生と日研生が秋学期に来日するため秋学期の新規受講者数が特に増加すると考えられる。一方、継続期間はそれほど長いわけではなく、全体的には1年～2年程度受講する学習者が多い。

表6 受講者の内訳 (受講歴別)

	春 学 期		秋 学 期	
	人 数	%	人 数	%
新規受講者	146	59.8%	222	70.7%
継続受講者	98	40.2%	92	29.3%
計	244	100.0%	314	100.0%

出身地域 (表7) については、1年を通して中国が多く、全体の30%程度を占める。次に他のアジアが全体の23%程度を占め、韓国の20%と続く。出身地域はアジアだけで学習者全体の70%以上を占めていることが分かる。

表7 受講者の内訳 (出身地域別)

	春 学 期		秋 学 期	
	人 数	%	人 数	%
中国・台湾	73	29.9%	100	31.8%
韓国	49	20.1%	65	20.7%
他アジア	57	23.4%	73	23.2%
ヨーロッパ	27	11.1%	36	11.5%
北米	15	6.1%	15	4.8%
その他	23	9.4%	25	8.0%
計	244	100.0%	314	100.0%

### 3. 受講者による授業評価

JLCでは、春学期末(6月)と秋学期末(2月)に、学習者による授業評価を実施している<sup>2</sup>。授業評価の結果はJLCに関わるセンターの教員<sup>3</sup>で構成される「日本語教育方法検討会」(年2回実施)で報告され、コース全体あるいは個別クラスの改善と見直しに活用されている。

平成18年度(2006年)年の評価は、コース終了日までに学習者がオンラインシステムにログインし評価を入力した。入力率は春学期が70.5%、秋学期が64.8%であった。以下に実施された授業評価の結果をまとめる。

#### 3-1 授業内容について

##### (1) 授業の難易度

質問：この授業の難易度は全体としてどうでしたか。

- a. とてもやさしかった      b. やさしかった      c. どちらとも言えない  
d. むずかしかった      e. とてもむずかしかった

表8 授業の難易度

			易しい	やや易しい	丁度よい	やや難しい	難しい
総合	初級	春学期	3.2%	19.4%	54.8%	21.0%	1.6%
		秋学期	1.3%	11.3%	58.8%	27.5%	1.3%
	中上級	春学期	0.0%	20.0%	66.7%	13.3%	0.0%
		秋学期	0.0%	7.7%	61.5%	23.1%	7.7%
漢字		春学期	2.1%	20.8%	56.3%	16.7%	4.2%
		秋学期	2.2%	19.6%	56.5%	21.7%	0.0%
会話		春学期	0.0%	28.6%	67.9%	3.6%	0.0%
		秋学期	6.1%	21.2%	57.6%	15.2%	0.0%
読解		春学期	0.0%	28.6%	57.1%	14.3%	0.0%
		秋学期	0.0%	16.7%	83.3%	0.0%	0.0%
作文		春学期	0.0%	7.1%	85.7%	7.1%	0.0%
		秋学期	0.0%	7.7%	76.9%	15.4%	0.0%

## (2) 宿題の量

質問：宿題の量は適当でしたか。

- a. 少なかった                      b. もう少しあったほうがよかった      c. ちょうどよかった  
d. 少し多かった                      e. たいへん多かった

表9 宿題の量

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総合	初級	春学期	1.6%	4.8%	71.0%	21.0%	1.6%
		秋学期	0.0%	3.8%	77.5%	17.5%	1.3%
	中上級	春学期	0.0%	6.7%	73.3%	20.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	7.7%	92.3%	0.0%	0.0%
漢字		春学期	0.0%	10.4%	62.5%	27.1%	0.0%
		秋学期	0.0%	2.2%	69.6%	26.1%	2.2%
会話		春学期	3.6%	7.1%	85.7%	3.6%	0.0%
		秋学期	0.0%	6.1%	90.9%	3.0%	0.0%
読解		春学期	0.0%	0.0%	85.7%	14.3%	0.0%
		秋学期	0.0%	8.3%	75.0%	16.7%	0.0%
作文		春学期	0.0%	21.4%	50.0%	28.6%	0.0%
		秋学期	0.0%	7.7%	92.3%	0.0%	0.0%

## (3) 授業の回数

質問：1週間の授業回数は適当でしたか？

- a. 少なかった                      b. もう少しあったほうがよかった      c. ちょうどよかった  
d. 少し多かった                      e. たいへん多かった

表10 授業の回数

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総合	初級	春学期	1.6%	8.1%	79.0%	9.7%	1.6%
		秋学期	0.0%	7.5%	81.3%	10.0%	1.3%
	中上級	春学期	0.0%	30.0%	66.7%	3.3%	0.0%
		秋学期	0.0%	7.7%	92.3%	0.0%	0.0%
漢字		春学期	0.0%	12.5%	87.5%	0.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	8.7%	87.0%	4.3%	0.0%
会話		春学期	3.6%	10.7%	85.7%	3.6%	0.0%
		秋学期	3.0%	12.1%	81.8%	3.0%	0.0%
読解		春学期	0.0%	14.3%	85.7%	0.0%	0.0%
		秋学期	0.0%	16.7%	83.3%	0.0%	0.0%
作文		春学期	14.3%	0.0%	78.6%	7.1%	0.0%
		秋学期	0.0%	7.7%	84.6%	7.7%	0.0%

## (4) 開講期間

質問：コースの長さ（5週間）は適当でしたか。

- a. 短かった                                      b. もう長いほうがよかった                      c. ちょうどよかった  
d. 少し長かった                                      e. たいへん長かった

表11 開講期間

			少ない	やや少ない	適量	やや多い	多い
総合	初級	春学期	1.6%	8.1%	79.0%	9.7%	1.6%
		秋学期	0.0%	16.3%	77.5%	6.3%	0.0%
	中上級	春学期	0.0%	30.0%	66.7%	3.3%	0.0%
		秋学期	0.0%	23.1%	76.9%	0.0%	0.0%
漢字		春学期	0.0%	12.5%	87.5%	0.0%	0.0%
		秋学期	2.2%	21.7%	71.7%	4.3%	0.0%
会話		春学期	0.0%	10.7%	85.7%	3.6%	0.0%
		秋学期	0.0%	15.2%	81.8%	3.0%	0.0%
読解		春学期	0.0%	14.3%	85.7%	0.0%	0.0%
		秋学期	8.3%	0.0%	75.0%	16.7%	0.0%
作文		春学期	14.3%	0.0%	78.6%	7.1%	0.0%
		秋学期	7.7%	15.4%	69.2%	7.7%	0.0%

## (5) 授業の進度

質問：授業のスピードは適当でしたか。

- a. 遅かった                                      b. もう少し速いほうがよかった                      c. ちょうどよかった  
d. 少し速かった                                      e. たいへん速かった



表14 予習時間

\*( ) 内の数値は時間

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文
春学期	2.0	1.4	2.0	1.3	1.4	1.5
秋学期	2.8	1.8	1.8	1.9	1.5	2.9

## (2) 復習にかかる時間

質問：授業の復習するのにかかった時間はどれぐらいでしたか。 毎回平均\_\_\_\_\_時間ぐらい

表15 復習時間

\*( ) 内の数値は時間

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文
春学期	1.9	1.3	2.2	0.9	1.1	1.3
秋学期	1.9	2.8	1.4	1.3	2.8	2.5

## 3 - 3 教師に対する評価

各項目ともに、数値が高いほど高い評価である。最大値は4.0で、3.0以上が一応の目安となる。

## (1) 授業時間の厳守

質問：授業は時間どおり行われましたか。

- a. 強くそう思う (4.0)      b. そう思う (3.0)      c. どちらとも言えない (2.0)  
 d. そう思わない (1.0)      e. 全くそう思わない (0.0)

表16 授業時間の厳守

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文
春学期	3.3	3.6	3.5	3.5	2.7	3.6
秋学期	3.3	3.7	3.5	3.6	3.8	3.5

## (2) 教育への熱意

質問：教師に授業への熱意が感じられましたか。

- a. 強くそう思う (4.0)      b. そう思う (3.0)      c. どちらとも言えない (2.0)  
 d. そう思わない (1.0)      e. 全くそう思わない (0.0)

表17 教育への熱意

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文
春学期	3.6	3.5	3.7	3.7	3.3	3.7
秋学期	3.6	3.8	3.7	3.5	3.8	3.7

## (3) 授業の準備

質問：(教師の) 授業の準備は十分になされていたと思いますか。

- a. 強くそう思う (4.0)      b. そう思う (3.0)      c. どちらとも言えない (2.0)  
 d. そう思わない (1.0)      e. 全くそう思わない (0.0)

表18 授業の準備

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文
春学期	3.6	3.6	3.6	3.6	3.4	3.6
秋学期	3.5	3.7	3.7	3.4	3.8	3.8

## (4) 説明の分かりやすさ

質問：先生の指示・説明はどうでしたか。

- a. とてもわかりやすかった (4.0)      b. わかりやすかった (3.0)  
 c. どちらとも言えない (2.0)      d. 少しわかりにくかった (1.0)  
 e. わかりにくかった (0.0)

表19 説明の分かりやすさ

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文
春学期	3.4	3.2	3.6	3.5	3.0	3.5
秋学期	3.2	3.5	3.5	3.4	3.3	3.5

## 3 - 4 総合評価

数値が高いほど評価が高いと言える。最大値は100%で、80%以上が一応の目安である。

質問：あなたはこのコースの授業にどのくらい満足していますか。 \_\_\_\_\_ %

表20 総合評価

	初 級	中上級	漢 字	会 話	読 解	作 文
春学期	87.3	88.6	91.3	90.0	77.3	85.9
秋学期	84.7	93.0	89.3	86.8	90.2	90.7

## 3 - 5 評価の分析

以下に平成18年度の評価についてまとめる。

- 1) 各コースとも春学期・秋学期ともにおおよそ高い評価を得ていると言えるが、春学期の読解コースは他コースよりやや評価が分散したり評価が低い項目があった。春学期の読解コースは学習者数が少なかったため、学習者個々の意見が全体としての評価に大きく影響したのではないかと考えら

れる。秋学期は読解コースの受講者数も多く、他コースと同様の高い評価を得ている。

- 2) 宿題に関して、漢字コースが春学期・秋学期ともに、他コースより「(量が) やや多い」という評価を得ている。漢字の学習は授業時間内のみで完結するものではなく、読み書きに関する自習が重要な役割を担っている。そのため他コースに比べ宿題の量が多くなっていると考えられる。
- 3) 1クラス当たりの受講者数については、春学期に比べ秋学期は「やや多い」と回答した学習者の割合が高い。秋学期に来日する留学生が多いため、平成18年度の秋学期(314名)は春学期(244名)の1.3倍近い学習者が日本語コースを受講した。秋学期はクラス数を増やしているが、学習者が日本語の授業を受講できる時間帯に制限があり、また教師数も限られているため、特定の時間帯のクラスの受講者数が多くなってしまいうという現状がある。

#### 4. 今後の課題

今後の課題としては以下の点を挙げることができる。

##### 1) 複数キャンパスへの対応

現在、箱崎・筑紫・伊都の合計3キャンパスで日本語の授業を行っているが、その他のキャンパスでも日本語の授業を開講してほしいという声が挙がっている。しかし、教師数には限りがあるため全ての需要に応えるのは難しい。今後、キャンパスが分散されている状態でどのように日本語の授業を提供していくか検討する必要がある。

##### 2) 伊都キャンパスでの日本語コースの整備

平成18年度より伊都キャンパスにおける日本語コースを開講したが、まだ規模が小さく箱崎キャンパスのようにクラスを運営するのは難しい。今後、徐々に日本語コースの機能を伊都キャンパスに移行していくことになるが、その基盤となるものを次年度も少しずつ整えて行く必要がある。

##### 3) コースの枠組み

平成15年度(2003年)より5期制を導入してきた。5期制を導入することにより、来日期間のずれた学習者が長期間待たずに日本語コースに編入することができるようになり、そのメリットは大きい。

一方、第1期から第4期までが通常コースであり第5期は特別補講コースという位置づけになっているが、第5期は、入試があるため受講しない学習者がおり、どのコースを特別補講コースとして開講するか等の見通しが立てにくい。また、1年で帰国する短期留学生は第5期も通常コースの内容の続きを勉強したいと希望する者が多い。今後、5期制をどのように活用していくのか、再検討する必要がある。

##### 4) 教材の見直し

現在JLCの初級コースで使用している『Total Japanese』は1994年に出版されたものであり、内容的に現代社会に対応していない箇所もあるため、今後、時間をかけて、新教材使用の可能性を検討していく必要がある。

## 資料

## アンケート 学習者による授業評価

日本語コースに関するアンケート Students Evaluation of Japanese Language Courses

あなたのクラス \_\_\_\_\_ - \_\_\_\_\_

- I have taken this course
- a. for 5 weeks (=1round) only
  - b. for 10 weeks (=2rounds)

## A. 授業の内容について Regarding the course content

1. このコースでよく練習できたことは何でしたか。 What did you practice the most in this course?
2. もっと練習したかったことは何でしたか。 What did you want to practice more?
3. この授業の難易度は全体としてどうでしたか。 How difficult was the course overall?
  - a. とてもやさしかった very easy
  - b. やさしかった easy
  - c. どちらとも言えない neither easy nor difficult
  - d. むずかしかった difficult
  - e. とてもむずかしかった very difficult

コメント : comments:

4. 宿題の量は適当でしたか。 Was the amount of homework given in the course appropriate?
  - a. 少なかった too little
  - b. もう少しあったほうがよかった needed a bit more
  - c. ちょうどよかった enough
  - d. 少し多かった a bit too much
  - e. たいへん多かった far too much

コメント :

5. 1週間の授業回数は適当でしたか? Was the frequency of the class appropriate?
  - a. 少なかった too little
  - b. もう少しあったほうがよかった needed a bit more
  - c. ちょうどよかった enough

- d. 少し多かった a bit too much
- e. たいへん多かった far too much

6. コースの長さは適当でしたか。 Was the length of the course appropriate?

- a. 短かった too short
- b. もう長いほうがよかった needed to be a bit longer
- c. ちょうどよかった long enough
- d. 少し長かった a bit too long
- e. たいへん長かった far too long

7. 授業のスピードは適当でしたか。 Was the speed of the class appropriate?

- a. 遅かった too slow
- b. もう少し速いほうがよかった needed to be a bit faster
- c. ちょうどよかった enough
- d. 少し速かった a bit too fast
- e. たいへん速かった far too fast

8. クラスの大きさ (学生の数) は適当でしたか。 How was the class size?

- a. 小さい too small
- b. もう少し大きいほうがよかった needed to be a bit larger
- c. ちょうどよかった good size
- d. 少し大きかった a bit too large
- e. たいへん大きかった far too large

妥当な人数は ( ) 人ぐらい The ideal class size would have been about ( ) students.

B. 自分自身について Regarding your own participation / study

1. 授業の予習するのにどのくらい時間がかかりましたか。 How long did it take to prepare for each lesson?

毎回平均 \_\_\_\_\_ 時間ぐらい                      On average about \_\_\_\_\_ hour(s) per lesson

2. 授業の復習するのにかった時間はどれくらいでしたか。 How long did it take to review each lesson?

毎回平均 \_\_\_\_\_ 時間ぐらい                      On average about \_\_\_\_\_ hour(s) per lesson

3. この授業に自分として意欲的に取り組んだと思いますか。 Do you think that you became actively involved in this course?

- a. 強くそう思う Yes, very much so
- b. そう思う Yes
- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. そう思わない No
- e. 全くそう思わない Not at all

C. 先生について Regarding the instructor(s)

1. 授業は時間どおり行われましたか。 Was class conducted in a timely fashion?

- a. 強くそう思う Yes, very much so
- b. そう思う Yes
- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. そう思わない No
- e. 全くそう思わない Not at all

2. 教師に授業への熱意が感じられましたか。 Did you feel that the instructor(s) had enthusiasm for the course?

- a. 強くそう思う Yes, very much so
- b. そう思う Yes
- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. そう思わない No
- e. 全くそう思わない Not at all

3. (教師の) 授業の準備は十分になされていたと思いますか。 Was the instructor(s) adequately prepared for class?

- a. 強くそう思う Yes, very much so
- b. そう思う Yes
- c. どちらとも言えない Couldn't say either way
- d. そう思わない No
- e. 全くそう思わない Not at all

4. 先生の指示・説明はどうでしたか。Was the instruction and explanation given by the instructor(s) clear?
- a. とてもわかりやすかった Yes, very clear
  - b. わかりやすかった Yes
  - c. どちらとも言えない Couldn't say either way
  - d. 少しわかりにくかった Not so clear
  - e. わかりにくかった Not clear at all

D. 総合評価 Overall evaluation

1. あなたはこのコースの授業にどのくらい満足していますか。How satisfied were you with this course?
- \_\_\_\_\_ %
- コメント Comments (このコースは具体的にどんなところがよかったですか What in particular was good about the course?)

2. その他意見があれば自由に書いて下さい。Additional comments if any :

注

- 1 データは学習者の自己申告に基づいたものである。
- 2 資料を参照。
- 3 平成18 (2006) 年現在、留学生センターの日本語教育部門には、専任教官が7名、非常勤講師が13名所属している。
- 4 総合コースのうち、J-1~J-4までは火曜日~金曜日まで1日に1コマ、1週間に計4コマ授業を行った。J-5とJ-6は1週間に2コマ、J-7は1週間に1コマ授業を行った。技能コース(漢字、会話、読解、作文)はいずれも1週間に2コマ授業を行った。



## 後期

開講式（日韓予備教育、日本語・日本文化研修コースと合同で）	10月12日
授業開始	10月13日
防災センター見学	10月17日
健康管理についての講義（健康科学センター：上園慶子）	10月26日
三者面談（指導教員・留学生・コーディネーターの三者）	10月下旬 - 11月上旬
見学旅行（熊本城、阿蘇山）	11月11日
書道の授業（学外講師）	1月16日
小学校訪問（福岡市立香陵小学校）	1月30日
日本人学生との会話（留学生センター指導部門：高松里）	2月13日
発表会（文集『世界の輪35号』に収録）	2月15日
授業終了	3月9日
閉講式	3月15日

## 3) 受講者

受講者は、文科省の国費外国人留学生のうち九州大学及び北部九州地区の大学へ配属された研究留学生、福岡教育大学で研修予定の教員研修留学生（後期のみ）、学内募集に応募した九州大学の研究生である。

## 前期 17名

中級2名を含む。中級者は「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」<sup>3</sup>でレベルの相当するクラス（複数）を受講。

出身：インドネシア（4名）、スリランカ（2名）、イラン、グアテマラ、セネガル、ドミニカ共和国、ハンガリー、フィリピン、ブルネイ、ペルー、ボスニア・ヘルツェゴビナ、南アフリカ共和国、ミャンマー

進学先：九州大学14名、九州工業大学2名、福岡女子大学1名

## 後期 12名

中級2名を含む。中級者は「九州大学留学生のための日本語コース（JLC）」でレベルの相当するクラス（複数）を受講。

出身：中国（3名）、エジプト（2名）、イラン、カナダ、ハンガリー、フィリピン、ブラジル、ミャンマー、メキシコ

進学先：九州大学7名、福岡教育大学4名、その他1名

## 4) 担当者

## 前期担当

専任：吉川裕子（コーディネーター）・郭俊海

非常勤講師：植田久子・柴田あづさ・高嶋文・高田恭子・西岡いずみ・疋田美伸・藤本綾香・松崎定子・松本さえ・和田玉己

限	時 間	クラス	月	火	水	木	金
2	10 : 30 - 12 : 00	A	高田	植田	郭	松崎	和田
		B	高嶋	和田	松崎	植田	松本
3	13 : 00 - 14 : 30	A	高嶋	和田	松本	和田	疋田
		B	高田	藤本	西岡	松崎	和田
4	14 : 50 - 16 : 20	A	吉川	松崎	柴田	植田	吉川
		B	高嶋	植田	吉川	和田	疋田

## 後期担当

専任：吉川裕子（コーディネーター）・郭俊海

非常勤講師：植田幸子・高嶋文・高田恭子・疋田美伸・藤本綾香・松崎定子・松本さえ・和田玉己・西頭由紀子・川邊理恵・柴田あづさ

## JLC コースとの連携により、3回時間割を変更

&lt; 10月13日～10月20日 &gt;

限	時 間	クラス	月	火	水	木	金
2	10 : 30 - 12 : 00	A	高田	和田	松崎	高嶋	植田
		B	高嶋	高田	郭	和田	松本
3	13 : 00 - 14 : 30	A	高嶋	和田	松本	高田	和田
		B	高田	藤本	松崎	和田	疋田
4	14 : 50 - 16 : 20	A	吉川	松崎	郭	和田	疋田
		B	高嶋	和田	吉川	松崎	吉川

&lt; 10月23日～12月22日 &gt; 伊都キャンパスを含む JLC のクラスの増加に対応するため

限	時 間	クラス	月	火	水	木	金
2	10 : 30 - 12 : 00	A	高嶋	和田	郭	和田	松本
		B					
3	13 : 00 - 14 : 30	A	高嶋	和田	松本	高田	和田
		B		藤本	松崎	和田	
4	14 : 50 - 16 : 20	A	吉川	松崎	郭	松崎	吉川
		B			高嶋		

< 1月9日～2月16日 > 伊都キャンパスを含む JLC のクラスの減少に対応するため

限	時間	クラス	月	火	水	木	金
2	10:30 - 12:00	A	高田	和田	松崎	高嶋	植田
		B	高嶋	高田	西頭	和田	松本
3	13:00 - 14:30	A	高嶋	和田	松本	高田	和田
		B	高田	藤本	松崎	和田	疋田
4	14:50 - 16:20	A	吉川 高嶋	松崎	郭	松崎	疋田
		B	高田		吉川		吉川 和田

月・金の4限は発表会の準備の時間とし、3名で担当

< 2月19日～3月9日 > 研修延長コース<sup>4</sup>

限	時間	クラス	月	火	水	木	金
2	10:30 - 12:00	A	高田	和田	松崎	高嶋	疋田
		B	高嶋	松崎	西頭	高田	川邊
3	13:00 - 14:30	A	柴田	松崎	西頭	和田	川邊
		B	高田	藤本	松本	高嶋	植田
4	14:50 - 16:20	A	高嶋	藤本	松本	高田	植田
		B	柴田	和田	松崎	和田	疋田

### 3. 授業内容

#### 1) 授業時間数

前期：全17週 週15コマ 1コマ90分 合計 383時間

後期：全20週 週15コマ 1コマ90分 合計 450時間

#### 2) 使用教材 使用した教材の主なものは以下の通りである。

『Situational Functional Japanese Notes』 Vol.1、Vol.2 (以下 『SFJ』)

『Situational Functional Japanese Drills』 Vol.1、Vol.2

『Situational Functional Japanese Notes』 Vol.3 (後期のみ)

『Situational Functional Japanese Drills』 Vol.3 (後期のみ)

筑波ランゲージグループ著 凡人社

『BASIC KANJI BOOK』 Vol.1 加納千恵子・清水百合他著 凡人社

『わくわく文法リスニング99』 小林典子・フォード丹羽順子他著 凡人社

< 宿題として >

『毎日の聞きとり50日上』 宮城幸枝・三井昭子他著 凡人社

『WORKBOOK』<sup>5</sup> 日本語研修コース教材作成グループ 九州大学留学生センター

### 3) 主な授業内容

週間予定は固定したものではなく、1週間に1～2課を下記の内容で順次組み入れた。

週間予定表は受講者の様子を見ながら進捗と内容を調整し、2週間に1回配布した。

活動名称	内容	頻度・時期など
はつおんれんしゅう	New Words の発音練習	各課に入る前に
Word cards	New Words の絵カード	各課の初めに
SD : Structure Drills	文型導入・練習	1課平均3コマで
CD : Conversation Drills	会話練習	1課平均2コマで
MC : Model Conversation	会話練習	1課1コマで
TA : Tasks and Activities	4技能の総合練習	1課1コマで
わくわく	聴解	文型導入と練習の後で
かんじ	漢字	第5週目から 週1コマ

その他 ・読解、作文 (不定期)  
 ・各課の小テスト、4課毎のテスト

### 4. 成績の認定と報告

受講者の成績は下記の項目の得点を総合して判定を行った。60点以上を合格とし、センター委員会の承認を得て認定した。

平常点	小テスト	定期試験	発表	合計
30%	20%	40%	10%	100%

平常点：出席率＋宿題提出率＋クラス活動への積極性

小テスト：1課毎の語彙・文法・漢字の小テスト

定期試験：4課毎の試験（聴解・語彙・文法・インタビュー）4回＋漢字テスト1回

発表：発表会の評価

終了判定は、前期・後期それぞれ下記の通りで、全員合格であった。

総合評価	AA	A	B	C	不合格
数値 (%)	90～100	80～89	70～79	60～69	60未満
前期 (人)	5	8	2	0	0
後期 (人)	3	5	2	0	0

受講者の成績は進学先の指導教員宛てにセンター長名の文書を添えて送付した。報告した事項は、成績 (数値)、総合評価 (AA・A・B・C)、出席率、日本語習得状況 (5項目にわたり、「よくできる」から「できない」までの5段階評価)、学習態度 (日常の学習態度5項目に関する5段階評価) である。日本語習得状況と学習態度の5段階評価、発表会の評価に関しては講師会 (専任と非常勤講師による) で協議の上決定した。

## 5. 受講者からの評価

コース終了前に受講者による評価をアンケート形式で実施した。その結果は研修コース講師会で報告し、研修コースの改善の資料とした。コース運営の参考となる質問項目のみ以下に報告する。

## 1) 受講者による評価

前期 9月8日実施 回答者：15名

## 質問1 - 1 テキスト (『SFJ』) について

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
9	6	0	0	0	0

## 質問1 - 2 『WORKBOOK』について

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
14	1	0	0	0	0

## 質問2 各教材について

	大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
New Words 発音	14	0	0	0	0	1
Word Cards	15	0	0	0	0	0
SD	11	3	1	0	0	0
CD	10	5	0	0	0	0
MC	9	4	2	0	0	0
TA	8	5	2	0	0	0
わくわく	11	4	0	0	0	0
かんじ	14	1	0	0	0	0

## 質問3 もっと勉強したかったこと (複数回答可)

聴解	会話	文法	漢字	発音
7	10	6	9	3
読解	作文	語彙	その他	
5	3	6	1	

その他のコメント： 現実の日常会話

## 質問4 クイズとテストについて

	大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
クイズ・テスト(筆記)	10	5	0	0	0	0
インタビューテスト	12	3	0	0	0	0

## 質問5 宿題について

少ない	ちょうどいい	多い	無回答
0	13	2	0

## 質問6 授業以外の活動について

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
防災センター見学	14	1	0	0	0	0
天神ツアー	9	5	1	0	0	0
八女旅行	10	4	1	0	0	0
小学校訪問	13	1	1	0	0	0
書道	12	2	1	0	0	0
日本人学生との交流	6	6	2	0	0	1

## 質問7 「三者面談」について

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
12	3	0	0	0	0

## 質問8 「発表会」について

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
10	3	2	0	0	0

## 質問9 コースのスピードについて

大変速い	速い	ちょうどいい	遅い	大変遅い	無回答
3	7	5	0	0	0

## 質問10 コースや授業の案内について

大変よい	よい	まあまあ	不足	全然足りない	無回答
8	6	0	0	0	1

## 質問11 個人の問題に対する教員側の支援について

大変よい	よい	まあまあ	不足	全然足りない	無回答
9	5	0	0	0	1

## 質問12 コースへの満足度

満足度 92.5 %

100% (1人)    98% (3人)    95% (2人)    91% (1人)    90% (6人)  
 80% (1人)    無回答 (1人)

## 質問13 コースへの提案 (質問1～11のコメント部分も含む) (英文から和訳して抜粋)

- 1) コース運営に関して
  - ・既習者と未習者でクラスを分ける。(3名)
  - ・学生をがんばらせるようにコースの賞を出す。(1名)
- 2) 内容に関して
  - ・漢字の授業をもっと多くする。(4名)
  - ・日本人学生や日本人と会話の練習ができる時間をもっと多く。(3名)
  - ・CD や role play にもっと時間を。(2名)
  - ・もっと書く練習を。(2名)
  - ・読解教材をもっと。(2名)
  - ・話題別に語彙を増やすプログラムを。(1名)
  - ・宿題が多すぎる。提出するだけで学習の助けにならない。(1名)
- 3) 教授法に関して
  - ・各課の導入部でもっと英語での説明を。(2名)
  - ・理解していないことの暗記は難しい。先生は覚えさせる前に理解させる努力を。(1名)
- 4) 期間・進度に関して
  - ・『SFJ』 Vol.3の終わりまで進んだ方がいい (夏休みを短く、一日4コマにして)。(2名)
  - ・Vol.2に入ってから復習が追い付かなくなった。Vol.2はゆっくり進んだ方がいい。(1名)
- 5) 課外活動に関して
  - ・もっと field trip を (夏休みにも)。(3名)
  - ・八女旅行など課外活動の時、日本人学生も一緒にする。(1名)

後期    2月15日実施    回答者：10名

## 質問1 - 1 テキスト (『SFJ』) について

大変よい	よい	どちらとも言えない	よくない	全然よくない	無回答
7	3	0	0	0	0

## 質問 1 - 2 『WORKBOOK』について

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
7	3	0	0	0	0

## 質問 2 各教材について

	大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
New Words 発音	9	1	0	0	0	0
Word Cards	9	0	1	0	0	0
SD	6	4	0	0	0	0
CD	6	3	1	0	0	0
MC	6	3	1	0	0	0
TA	7	0	3	0	0	0
わくわく	8	2	0	0	0	0
かんじ	4	4	2	0	0	0

## 質問 3 もっと勉強したかったこと（複数回答可）

聴解	会話	文法	漢字	発音
6	8	1	1	3
読解	作文	語彙	その他	
0	1	4	0	

## 質問 4 クイズとテストについて

	大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
クイズ・テスト(筆記)	6	4	0	0	0	0
インタビューテスト	6	4	0	0	0	0

## 質問 5 宿題について

少ない	ちょうどいい	多い	無回答
1	6	2	1

## 質問6 授業以外の活動について

	大変興味深い	興味深い	どちらとも言えない	興味が持てない	全然興味が持てない	無回答
防災センター見学	8	1	0	0	0	1
天神ツアー	2	4	2	0	0	2
八女旅行	5	5	0	0	0	0
小学校訪問	8	2	0	0	0	0
書道	4	5	1	0	0	0
日本人学生との交流	5	4	1	0	0	0
日本の音楽	6	2	2	0	0	0

(無回答は欠席者)

## 質問7 「三者面談」について

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
5	1	3	0	0	1

## 質問8 「発表会」について

大変役に立つ	役に立つ	どちらとも言えない	役に立たない	全然役に立たない	無回答
4	3	2	1	0	0

## 質問9 コースのスピードについて

大変速い	速い	ちょうどいい	遅い	大変遅い	無回答
1	2	6	1	0	0

## 質問10 コースや授業の案内について

大変よい	よい	まあまあ	不足	全然足りない	無回答
7	3	0	0	0	0

## 質問11 個人の問題に対する教員側の支援について

大変よい	よい	まあまあ	不足	全然足りない	無回答
7	3	0	0	0	0

## 質問12 コースへの満足度

満足度 90.4 %

98% (1人)    96% (1人)    95% (3人)    90% (2人)

80% (1人)    75% (1人)    無回答 (1人)

質問13 コースへの提案（質問1～11のコメント部分も含む）（英文から和訳して抜粋）

- 1) コース運営に関して
  - ・漢字の授業は、漢字が必要な学生とそうでない学生によって二クラスにする。(1名)
- 2) 授業内容に関して
  - ・CD、MCの練習時間をもっと。(3名)
  - ・わくわくの復習の時間を。(1名)
  - ・毎週二回ぐらい日記を書いて提出する。(1名)
- 3) 教授法に関して
  - ・CDの中の決まり文句にも文法的な解説があると暗記しやすい。(1名)
  - ・語彙や文法の英語での解説が多かったら、もっと理解しやすくなる。(1名)
  - ・コースの初期にもっと英語が使用されれば、理解を助け、学習スピードが上がる。(1名)
- 4) 期間・進度に関して
  - ・もう少し進度をゆっくり。全くゼロから始めた学習者には消化が困難。(1名)
  - ・Vol.1～3の学習時間のバランスが取れていない。Vol.3の時間が短い。(1名)
- 5) 課外活動に関して
  - ・課外活動をもっと。(2名)
  - ・もっと深く日本のことを知ることができたらいい(例えば日本の家庭訪問など)。(1名)
  - ・日本人学生との会話は、自己紹介に多くの時間を使い、コントロールされたものだった。もっと自由に話せるプログラムを。(1名)
  - ・field tripの日は悪天候だった。雨天の場合日程の変更ができるといい。(1名)
- 6) 教材に関して
  - ・Vol.1～3に出る全ての動詞の活用一覧表がほしい。(1名)
  - ・Word Cardsの絵の表わす意味が明らかでないことがある。(1名)

研修延長コース（2月19日～3月9日） 3月9日実施 回答者：11名

研修延長コースでは、通常のコースとは異なるプログラムをいくつか実施した。『SFJ Vol.3』の使用、教師以外の日本人をビジターとした日本人との会話（毎週1回）などである。通常のコースとは別形式で学生による評価を行った。その結果は下記の通りである。

質問1 コースについて

コースの長さ	長い	ちょっと長い	ちょうどいい	ちょっと短い	短い
	0	2	8	1	0
コースの内容	とてもいい	いい	まあまあ	あまりよくない	無回答
	9	1	0	0	1

## 質問2 プログラムについて

	とてもいい	いい	まあまあ	あまりよくない	無回答
SFJ Vol.3	10	0	0	0	1
1分スピーチ	10	1	0	0	0
日本人との会話	11	0	0	0	0
3級聴解	8	3	0	0	0
箱崎宮散策	7	1	1	1	1
E-mailを書く	9	1	0	0	1
着物を着る	8	3	0	0	0

## 2) 評価のまとめ

前期・後期ともに、日本語教育、適応支援の活動の両面で概ね高い評価を得ていると言える。

受講者の主な要望として、下記の点が挙げられる。

研修コースは基本的に日本語学習歴のない受講者を対象としているが、数週間から数か月間日本語を勉強してきた受講者が若干入っていることから、日本語習得の進度によって、テキストの Vol.3まで終了させてほしいという希望と進度をもっと遅くしてほしいという希望が出る。前期にはレベル別クラス編成の要望が3名から出ている。

質問3「もっと勉強したかったこと」に関しては、前期・後期ともに「会話」という回答が多い。特に前期は、授業で会話時間を増やすだけでなく、日本人学生や日本人と会話の練習ができる時間を望んでいる。「漢字」学習の希望は前期には多いが、後期は少なく、「漢字が必要な学生とそうでない学生によって2クラスに分かれるといい」という意見が見られる。

その他、複数の受講者から、授業での英語による解説、課外活動の増加の要望が出ている。

## 6. 今後の課題

今後の課題として、下記の3点を挙げるができる。

## コース内容の検討

受講者の要望はあるが、限られた時間の中でテキストの Vol.3 まで進み、課外活動も増やすことは困難である。英語の使用が理解を促進させるという意見もあるが、全ての受講者が英語を問題なく理解できる現状ではないし、教師の側も英語での解説能力が同一ではない。しかし、これらの要望があるということは、授業をより効果的にする上で検討する意義があると考えられる。さらにレベル別クラス編成の要望に対しても検討する必要がある。

## 会話の練習希望への対応

受講者による評価の中で、前期後期を通じて、「もっと勉強したかったこと」の一位は「会話」である。教師以外の日本人との会話の機会を開拓すると共に、ボランティア会話サークル等の紹介を積

極的に行っていく。本年度からすべての受講者にチューターが付くことになったので、日本人の学生に出会う機会の増えることが期待できる。見学旅行などの機会にチューターに声をかけることを今後実行する。

#### 時間割の再編

留学生センターでは日本語研修コースとJLCコースとの融合が検討されている。本年度後期の研修コースでは、JLCコースの受講者数に合わせてクラス時間割を3度変更し対応した。この試みをコース間の融合に生かすことは十分考えられる。ただし、本稿の初めに述べたように、研修コースは日本における円滑な研究生生活の基礎を目指して予備教育を行っており、ある程度の時間を確保しなければならない。そうしたコースの性格を考慮した上で時間割の再編を考え、融合を図ることが必要である。

#### 注

1. 三者面談に関しては、「日本語研修コースにおける「三者面談」の実施と効果」として『九州大学留学生センター紀要』第16号に掲載予定。
2. 「日本語研修コース」『九州大学留学生センター紀要』第15号 P111 注1参照。
3. JLCコースに関しては、「日本語補講コース (JLC)」『九州大学留学生センター紀要』第14号 pp.21 - 35、「九州大学留学生のための日本語コース (JLC)」『九州大学留学生センター紀要』第15号 pp.85 - 99 参照。
4. 平成18年度後期は、研修コース第17周目の終了後に、研修延長コースを開設した(2月19日～3月9日)。研修コースの受講者10名と、JLCからの希望者(第5RoundでJ1cとJ2を修了した学習者)6名の計16名が参加した。テキストは『SFJ』Vol.3を使用した。
5. 『SFJ』Vol.1、Vol.2に準拠した学内使用版の練習問題集。日本語研修コース教材作成グループ(吉川裕子・柴田あづさ・高嶋文・藤本綾香・松本さえ)で2005年度に作成した。

## 全学教育科目の日本語

清水 百合\*

### はじめに

留学生対象の全学教育科目における日本語は、言語文化基礎科目に分類されている。留学生センターの教員と芸術工学部の教員が担当し、17コマを以下のように1年生の前期と後期、2年生の前期に振り分け、各クラスが10名前後で指導ができるように構成されている。

### 1. 平成18年度の学習内容

以下が時間割とその学習内容である。

前期				
1年生対象				
1	月	2限	聴 解	法学部 理学部 薬学部
2		3限	聴 解	工学部 芸術学部
3	火	2限	聴 解	経済学部 経工学部 工学部 21C プ 医学部
4		3限	聴 解	文学部 教育学部 医学部 歯学部 農学部
5	木	2限	総合基礎	法学部 理学部 薬学部
6		3限	総合基礎	工学部 芸術学部
7	金	2限	総合基礎	経済学部 経工学部 工学部 21C プ 医学部 歯学部
8		3限	総合基礎	文学部 教育学部 医学部 農学部
2年生対象				
9	月	1限	社会文化	文学部 教育学部 法学部 21C プ 理学部 薬学部 工学部 農学部
10	水	2限	社会科学	文学部 教育学部 法学部 経済学部 経工学部 21C プ 理学部 工学部 農学部
11	金	4限	自然科学	文学部 教育学部 法学部 経済学部 経工学部 21C プ 理学部 歯学部 工学部 芸術学部

このような時間割で授業を始めたのは、平成16年度からで18年度は3年目にあたる。この時間割では、教員が学習項目を同じように定めた授業を2コマずつ担当している。

例えば、下の表にあるように、1年の後期では1人の教員が月曜日の1限と2限の「作文」の授業を2コマ、別の教員が火曜日の1限と2限の「作文」の授業を2コマ担当している。この2人の教員はあらかじめ授業計画について話し合っている。また、同じく1年の後期に行われる「会話・発表」のように1人の教員が4コマを担当するというやり方で行われることもある。

\*九州大学留学生センター教授

しかし同じように定めた授業では、来る学生の能力によってクラス進度に差ができるのが通例である。

また2年生対象の日本語では、第一外国語として日本語を履修する際、文学部・教育学部・法学部・経済学部の学生は、3単位を取らなければならない。しかし18年度の時間割りでは経済部の学生は2単位しか取れなく実質上第一外国語をとして選択するのが困難な状況となっている。

後期				
1年生対象				
1	月	2限	作文	法学部 理学部 薬学部
2		3限	作文	工学部 芸術学部
3	火	2限	作文	経済学部 経工学部 21Cブ 医学部 工学部
4		3限	作文	文学部 教育学部 医学部 農学部
5	木	5限	会話・発表	文学部 教育学部 法学部 21Cブ 理学部 薬学部 工学部 芸術学部
6	金	5限	会話・発表	文学部 教育学部 経済学部 経工学部 21Cブ 理学部 医学部 歯学部 薬学部 工学部 農学部

その他の学部では学生が必要と思われる科目を、1年前期に2コマ（聴解、総合基礎）、1年後期に2コマ（作文、会話・発表）を全て受講できる。

## 2. カリキュラムの長所と短所

このように学生が特に一年生で全ての科目を受講できるようになったことの長所は、まず大学において専門を勉強するために必要な日本語の力のある程度まで引き上げることができるようになったことである。

特に入学したばかりの学生は、これからの大学生活においてどのような日本語の力が必要かということが分からないので、ただ漠然と日本語の力の不足を感じるに止まる。そこで16年度の改編では日本語を担当する教員たちが話し合い、過去に教えた学生の日本語における問題点を分析し、学部留学生在が欠如している日本語の力を補強する授業構成を考え、上記のような時間割を作成した。大学で講義を聴く力、レポートを書く力やゼミで発表する力をつけることを目的としたこのカリキュラムは、ある程度力があり、授業についていける学生には、バランスよく日本語の力が加わり最適である。

しかし、留学生の中には日本語の聴く力、話す力、読む力、書く力のバランスがよくない学生が少なくない。特に聴く力が弱い学生は、先生の講義が理解できないので、講義に出ても何もできない。後で友達にノートを見せてもらったり、自分で図書館に行き本を読んで勉強したりすることになるが、何をどのようにすればよいか分からないので努力の割に効果は少ない。また知っている語彙の数が少ない学生は、聴いても、読んでわからないことばかりである。このような学生は、上記の時間割で日本語を勉強しても、力をつけることは望めない。それ以前に特別に弱いところを補う必要があるからである。

入学試験に合格した留学生は、大学での勉強ができるとみなされている。しかし、入学試験でたま

たまよい点をとって合格しても、それまでの学習環境に恵まれないと、大学で必要な科目の勉強ができるレベルに到っていないのが現状である。現在の全学教育科目の日本語では、このように総合点では良いが、全てがよい訳ではなく、むしろバランスが著しく悪い学生に対処できていないのが短所となっている。

### 3. 学生の評価

まず全学教育機構自己点検・評価委員会によって行われる「学生による授業評価（平成18年度前期）のデータ一覧」によると、18年度前期に行われた日本語の授業に対して以下のような評価がなされている。11クラスが開講され、登録者総数は62名、アンケートの回収率は75.8%であった。

#### 履修してよかったと思う点

- |                        |       |
|------------------------|-------|
| 1. 新たな知識を獲得することに意味があった | 69.5% |
| 2. 教師と学生間に双方向性があった     | 65.2% |
| 3. 授業内容とその構成がてきせつだった   | 72.7% |
| 4. 自分の能力に自信を持つ事ができた    | 47.8% |

パーセントは、11クラスの平均であるので、上記の項目について評価されなかったクラスもあるが、概ね良好だと言える。

#### 授業の改善を要望したい点

- |                       |       |
|-----------------------|-------|
| 1. 視聴覚機器を活用してほしい      | 17.3% |
| 2. 授業内容をもっと精選してほしい    | 8.6%  |
| 3. 授業の進行をもっとゆっくりしてほしい | 8.6%  |

日本語のクラスでは、全員がほぼ同じレベルというわけではない。ハンディとなるのは、聞き取りが弱い学生である。学生間のレベル差が大きいときに、上記のような改善の要望が出る。これは特に一年生の一学期に多い。

次に「学生による授業評価（平成18年度後期）のデータ一覧」によると、18年度後期に行われた日本語の授業に対して以下のような評価がなされている。6クラスが開講され、登録者総数は28名、アンケートの回収率は89.3%であった。

#### 履修してよかったと思う点

- |                        |     |
|------------------------|-----|
| 1. 新たな知識を獲得することに意味があった | 72% |
| 2. 授業内容とその構成がてきせつだった   | 56% |
| 3. 授業を通して思考力をトレーニングした  | 44% |
| 4. 授業内容が実生活や現実問題に結びついた | 44% |

前期に比べて、広く授業内容を見ることができるようになってきているように思われる。

#### 授業の改善を要望したい点

1. 理解度を把握して授業を進めてほしい 8%
2. 授業内容をもっと易しくしてほしい 4%
3. 授業の進行をもっとゆっくりしてほしい 4%
4. 学生にもっと厳しくしてほしい 4%

これらもまた学生のレベル差に起因している要望だと言える。

#### 4. 今後の課題

もし各学部の入学試験における日本語能力の受け入れ基準が変わることがないとすると、日本語能力の4技能（読む・書く・話す・聞く）のバランスがよくない学生は現行のカリキュラムでは力をつけるのが難しいという問題は解決されないまま、存続する。そこで、現在は日本語の履修は1年の前期・後期と2年の前期だけに限定されているものを、学生の必要度に応じて、長くすることができるか、できるとしたらどのようにするかも今後検討していきたい。

## 日本語 CAI (Computer Assisted Instruction) コース

鹿島英一\*

CAI コースは、通常の補講コース（週2回以上）と時間的に合わない、定期的な時間が取れない、来日時期が通常と異なる、など諸事情のある本学の留学生や客員研究員を対象とした日本語補講コースで、学習内容の入ったコンピュータの使い方を理解し、各学習者が自分に合った進捗と目的に応じ、学習できる点に特徴がある。

初歩からサバイバルが可能なレベルまで対応できるだけでなく、中級レベルに達した（漢字圏出身などの）既習者にもコンピュータで復習できる充分好い機会にもなる。担当教員は（機材の使い方の外に）教室で、各学習者個人からの日本語やその学習方法に関する質問にも細かく対応している。尚、コース選択はニーズに応じてある程度柔軟に対応している。

平成18年度のコース概要は以下のとおりである。

前期：平成18年4月13日～7月14日

CAI 1 水曜日 13:00～14:30 (第3時限)

CAI 2 木曜日 13:00～14:30 (第3時限)

後期：平成18年10月11日～平成18年12月20日、1月10日～2月7日

CAI 水曜日 13:00～14:30 (第3時限)

担当教員：鹿島英一

教室：情報サロン室（留学生センター1F）

定員：学習に利用可能なコンピュータの台数（春10台／秋5台）。

CAI 2の方がレベルが上で、初級の学習を一応終わっている者。

尚、後期からが週1回なのは工学関連施設の伊都キャンパスへの移転との絡みである。

教材：以下の7種類。

1. ひらがな (HIRAGANA)
2. かたかな (KATAKANA)
3. 漢字 (KANJI)——漢太郎 (KANTARO) 1
4. 漢字 (KANJI)——漢太郎 (KANTARO) 2
5. 漢字 (KANJI)——漢太郎 (KANTARO) 3
6. 動詞活用 (Verbal Conjugations)——まなびや (Manabiya)
7. 中級入門までの総合練習 (General Japanese Drills up to Intermediate Learners)

---

\*九州大学留学生センター教授

申込方法：留学生センター（箱崎キャンパス）の留学生課で所定の申請用紙に書き込んで、留学生交流係に事前に提出する。

概要：学習者ニーズの多様化が一層進んでいる。曾てはひらがなの既習を前提としていたが、今はそれもない。また、いつからでも、また可能な時だけでも参加できる。学習者数は、前期6名、後期2名で、学習者のレベルは極く初級から比較的高い中級（復習）までバラエティに富んでおり、進度もコースの目的に沿ったものであった。

学習者は通常の補講コース（週2回以上）と併用する者の方が以前の能力の回復を目指す者より多い。また、ひらがなの学習が終わるところまでに足が遠退く傾向が見られる一方で、熱心にクラスに通って用意した質問と共に弱点を細かくつぶしてゆく学習者も少数いた。

尚、自らの日程調整で、時に日本語 CAI 開放時間<sup>\*)</sup>の利用で代替する学習者もいた。

参考<sup>\*)</sup>：

本コースに出席して利用法を習得した学習者などが本コース開講時間以外(月～金 8:45～17:00: 日本語 CAI 開放時間)に、同じ場所、同じ機材を利用して、学習することは本学の留学生や訪問研究員なら誰でも可能（担当教員なし）である。その場合は、留学生課の担当係に申し出た上で、必要品などを受け取ってから利用してもらいたい。

## 比較社会文化学府での実践

因 京 子\*

平成18年度は、因京子、小山悟の2名が比較社会文化学府の日本語教育講座に所属し、教育に携わった。但し、因は18年7月まで長期研修中であったため、前期の授業は行っていない。

### 1. 担当科目

因京子 日本語教育方法学 ・  
日本語教育調査研究方法論  
日本語教育総合演習  
博士総合演習  
博士演習  
博士特別研究

小山悟 日本語教育学 ・ ・ ・  
日本語教育調査研究方法論  
日本語教育総合演習  
日本語教育特別研究  
博士総合演習 ・  
博士演習 ・

### 2. 修士号取得への関与の状況

平成18年度に因京子が指導教員として修士号取得のための指導と論文審査に関わった学生の氏名と論文名は以下の通りである。

晏洪イン 日本語におけるヘッジ語の使用実態に関する考察 - 自然談話データ分析を通じて -  
王萌 不同意表明の仕方についての社会言語学的考察  
金起勲 日本語・韓国語における漢語連結に関する基礎的研究  
- 新聞記事における漢語の連結のあり方を中心に -  
張碩 謂われのない非難に対する言語行動の日中対照研究 - 弁明行為を中心に -  
范碧琳 「のだ」の意味と用法に関する研究 - 中国語との対照を通して

---

\*九州大学留学生センター准教授

平成18年度に小山悟が指導教員として修士号取得のための指導と論文審査に関わった学生の氏名と論文名は以下の通りである。

- 崔垂珍 中国人日本語学習者によるアスペクトの習得研究 - SRE 理論の観点から  
 ノーラン・スーザン Is the Relative Clause Tense Relative? (関係代名詞節は相対時制か?)

### 3. 博士号取得への関与の状況

平成18年度、因京子は下の博士号請求論文の論文審査委員を務めた。

- リズワン・アプリミティ (比文博士号乙第15号)  
 中華人民共和国期におけるウイグル人の学校教育に関する研究

### 4. 指導学生の実績

因京子の指導している学生が平成18年度中に発表した論文は以下の通りである。尚 は、査読のある雑誌であることを示す。

- 山路奈保子 「小説における女性形終助詞『わ』の使用」, 日本語とジェンダー第6号, pp.20-29  
 山路奈保子 「日本語の『ほめ』についての一考察 - 『ほめ』を攻撃的に作用させる要因の分析 - 」, 日本語教育第130号, pp.100-109  
 金瑞賢 「韓国語と日本語における本動詞としての授受動詞の用法」 国際言語文学, 国際言語文学会 (韓国), pp.21-39  
 池澤明子 「地域日本語学習支援活動におけるイミディアット・メソッドの可能性」 第5回会話教育研究会論稿集』 会話教育研究会  
 山路奈保子 「文学作品を利用した上級日本語教育の試み - 異文化理解促進のために - 」, 比較社会文化研究第19号, pp.89-94

小山の指導学生が平成18年度中に発表した論文は以下の通りである。尚 は、査読のある雑誌であることを示す。

- キムユギョン 「韓国人日本語学習者を対象とした日本語の文構成能力に関する研究」, 『日本語教育論集』 第22号, pp.3-17, 国立国語研究所  
 キムユギョン 「日本語学習者の文章の分かりにくさについて - 言語的側面と認知的側面からの原因分析 - 」, 『POLYGLOSSIA』 12巻, pp.47-59, 立命館アジア太平洋大学  
 キムユギョン 「学習者の日本語の文配列における日本語能力と経験値の影響 - 韓国人日本語学習者を対象として」, 『POLYGLOSSIA』 13巻, pp.97-107, 立命館アジア太平洋大学  
 キムユギョン 「言語的側面と認知的側面からみた L2 (日本語) テクストの分かりにくさの原因」, 小山悟編 『スタディー・スキルの養成を目指した日本語教育プログラム開発のための基礎研究』 平成16~18年度科学研究費補助金研究成果報告書 (萌芽研究: 課題番号16652039), pp.62-70

麻生迪子「『そば』に関する意味・語用論的考察」、『日本文化學報』32号, pp.55-73, 韓国日本文化学会

麻生迪子・塩川恵理子「海外における日本語教育 - 中国・韓国の事例報告: 留学生の送り出し機関という側面から -」, 小山悟編『スタディー・スキルの養成を目指した日本語教育プログラム開発のための基礎研究』平成16~18年度科学研究費補助金研究成果報告書(萌芽研究: 課題番号16652039), pp.45-55

塩川絵里子「日本語学習者のアスペクト形式の習得に関する一考察」、『日本文化學報』32号, pp.139-152, 韓国日本文化学会

塩川絵里子「日本語学習者によるアスペクト形式『テイル』の習得 - 文末と連体修飾節との関係を中心に」、『日本語教育』134号, pp.12-21, 日本語教育学会

因京子の指導している学生が平成18年度中に行った学会発表は以下の通りである。

山路奈保子「女性形終助詞『わ』の用法について」, 日本語ジェンダー学会第7回研究大会 2006年6月, 東京外国語大学

トーンディノック・スカンヤー「タイ人学習者向け初級聴解鋼材開発のための研究 - タイ人学習者の聴解面における音声問題の指導法と教材作成提案 -」, 社会言語学会第18回大会, 2006年8月26日, 北星学園大学

王晓梅「日本語の文末スタイルの教育方法に関する基礎研究 - 丁寧体と普通体の使い方を中心に -」第9回東アジア言語文化フォーラム, 東アジア言語文化学会, 2006年12月15日, 上海外国語大学

石川朋子「日本の大学で学ぶ留学生の人間関係構築を助ける日本語教育を目指して」専門日本語教育学会第9回研究討論会, 2007年3月10日, 九州大学

山路奈保子「母語話者による留学生の論文作成支援についての一考察」専門日本語教育学会第9回研究討論会, 2007年3月10日, 九州大学

本多美保「ネイティブ教師に期待される役割と課題 - 教養科目における日本語教育を中心として -」韓国日本語学会第15回学術発表大会, 2007年3月31日, 嶺南大学校

小山の指導している学生が平成18年度中に行った学会発表は以下の通りである。

久木元恵「学習者のレベルがリキャストの気付きに与える影響 - 「直後発話」を判定基準として -」, 日本語教育学会春季大会, 2006年5月21日, 東京外国語大学

崔亜珍「中国人日本語学習者によるアスペクトの習得研究 - SRE理論の観点から -」, 2006(平成18)年度第1回日本語教育学会研究集会(九州地区), 2006年6月10日, 鹿児島大学

麻生迪子「『そば』に関する意味・語用論的考察」, 韓国日本学連合学会第四回国際学術発表大会, 2006年7月5日, 韓南大学校(韓国)

塩川絵里子「日本語学習者のアスペクト形式の習得に関する一考察」, 韓国日本学連合学会第四回国際学術発表大会, 2006年7月5日, 韓南大学校(韓国)

塩川絵里子「日本語学習者のアスペクト形式の習得」, 第7回国際日本研究・日本語教育シンポジ

ウム, 2006年10月29日, 中文大学 (香港)

武村美和「言語の表出から探る中国語母語話者の認知構造 - 日本語母 語話者との比較より」, 第7回国際日本研究・日本語教育シンポジウム, 2006年10月29日, 中文大学 (香港)

久木元恵「第三言語学習者の外国語学習観に関する基礎的調査 - カザフスタンの日本語学習者の場合 -」, 韓国日本学会第74回学術大会, 2007年2月10日, 建国大学校 (韓国)

麻生迪子「韓国における日本語教育」, 日本語教育国際シンポジウム「学習留学生の受け入れを考える - スタディー・スキルの養成を目指して」, 2007年2月10日, 九州大学

キムユギョン「言語的側面と認知的側面からみた L2 (日本語) テクストの分かりにくさの原因」, 日本語教育国際シンポジウム「学習留学生の受け入れを考える - スタディー・スキルの養成を目指して」, 2007年2月10日, 九州大学

塩川絵里子「中国の大学での日本語教育 - 長春大学光華学院の実例を通して -」, 日本語教育国際シンポジウム「学習留学生の受け入れを考える - スタディー・スキルの養成を目指して」, 2007年2月10日, 九州大学

## 日韓共同理工系学部留学生予備教育プログラム 2006年度（7期生）実施報告

岡崎 智己\*

太田 和秀\*

スカリー 悦子\*

柳原 正治\*\*

### 0. はじめに

本学における本プログラム生の受入れも今年で7年目を迎えた。昨年度までの受入れ体制を見直し、今年度からは予備教育が実施される留学生センターと予備教育終了後の受け入れ先となる工学部との連携を強化した。また、本プログラムに関わる教員各自の専門性を活かした受け入れ体制を構築することを目指して、統括コーディネータの下に複数のサブ・コーディネータを配置し、専門基礎科目教育、日本語教育、日本事情教育・異文化適応支援の各方面において、よりきめ細かくプログラム生に目の配れるようにした。今期来学した学生のみじめで努力する姿勢に負うところも大きいですが、全体として、今期の予備教育は順調に推移し、無事に所期の目的を達成して終了したと言っていいであろう。

### 1. 受入れ学生（7期生）

今期受入れた本プログラム生は計4名で進学先の学部・学科は一覧中の太字・斜線部に示す通りである。なお、受入数4名というのは、昨年度、一昨年度の実績と比較した場合、急減したかの感を与えるが、第1期生から第4期生までの受入れ実績（5名）とほぼ同水準であり、決して本学進学希望者が減少したということではないと理解している。<sup>1</sup>

学 科 名	00年度	01年度	02年度	03年度	04年度	05年度	06年度	計
	第1期生	第2期生	第3期生	第4期生	第5期生	第6期生	第7期生	
建 築 学 科	1	1	1	1	1	1		6
電気情報工学科	3	2		1		2	1	9
物質科学工学科	1		1	2	4	2		10
地球環境工学科					1			1
機械航空工学科		2	3	1	2	2	3	13
計	5	5	5	5	8	7	4	39

\*九州大学留学生センター教授

\*\*九州大学留学生センター長

## 2. プログラム・スケジュール

2006年度予備教育全期間（半年間）の授業予定は、例年のそれに準じて、以下のように定められた。

開講式	平成18年10月12日
オリエンテーション	同上
授業開始	平成18年10月13日
授業終了	平成19年2月16日
閉講式	平成19年3月15日

また、昨年度と同様、日本語研修コース（大学院入学前予備教育プログラム）と合同で、防災センター（福岡市）の見学や日帰りバス旅行（熊本城・阿蘇山）を実施した。

## 3. 授業科目

2006年度に実施された授業科目は以下の時間割にある通りである。専門基礎科目のうち、化学と物理の授業を担当する教員が工学部所属のため、週に一度、月曜日を伊都キャンパスで講義を受ける日と定めた。また、昨年までは留学生センター所属の教員がホームルームを担当してきたが、今年度からは工学部所属の留学生教育担当教員（留学生センター兼任教員でもある）がホームルームを行うこととなり、工学部に進学する本プログラム生に対し、より専門性に沿った視点から指導及びアドバイス等が与えられるようになった。

	月（伊都）	火（箱崎）	水（箱崎）	木（箱崎）	金（箱崎）
8：40 - 10：10					
10：30 - 12：00	化学	選択日本語（各自のレベル・必要性に合わせて受講）			
13：00 - 14：30	物理	数学 （線形代数）	数学 （微分・積分）	日本文化 日本事情	英語
14：50 - 16：20	ホームルーム	選択日本語（各自のレベル・必要性に合わせて受講）			
16：40 - 18：10		選択日本語（各自のレベル・必要性に合わせて受講）			

各科目授業担当者の所属は以下の通りである。

専門基礎科目・数学	数理学研究院 <sup>2</sup>
専門基礎科目・化学	工学研究院
専門基礎科目・物理	工学研究院
外国語科目・英語	言語文化研究院
外国語科目・日本語	留学生センター（日本語教育部門）
日本文化・日本事情	留学生センター（留学生指導部門）

なお、専門基礎科目と、英語および日本文化・日本事情の授業時間数は、各科目とも30時間ずつであった。日本語に関してはレベル判定テストを行った上で、全学の留学生向け日本語補講（JLCs）に設けられた技能別コースから各自4コースを選択受講するようにし、1コマ90分の授業を原則とし

て週8コマ、計15週間にわたって受講した。

#### 4. 学生チューターの配置

これまで本プログラム生には本学日本人学生による日本語会話パートナーを募集し、配置してきたが、今年度からは他の留学生の場合に合わせ、受入から半年間、本学学生の中から希望するものを学生チューターとして一対一で配置するようにした。学生チューターの主な役割は、福岡での生活や本学での勉学を行うに当たって、不慣れな留学生が遭遇するさまざまな場面での補助の提供である。毎月、活動報告（いつ会って、どんなことをしたか、その折の印象や気になったこと等々）を所定の書式に記入し、定期的に提出してもらったが、空港への出迎えに始まり、宿舍となる国際交流会館入館に当たっての手助けや外国人登録をする際の区役所への付き添い等、来日当初のサポートでは大いに助けられた。その後、キャンパス（伊都と箱崎）や市内主要箇所の案内が一通り済むと、時々会って一緒に食事をしたり会話を楽しむこともあったようであるが、お互い学生同士であり、必ずしもいつも同じキャンパスにいるわけではないので、それぞれが授業、その他の用事に追われ、なかなか会って話す時間の調整をつけるのが難しかったようである。

#### 5. 改善点

前回の報告（岡崎2007）で指摘した勉学への姿勢や生活態度に関する懸念は、今年度に限って言えば、まったく問題とならなかった。それは本稿の冒頭でも述べたように、今年度来学した学生の前向きでまじめな人柄に拠るところも大きかったと思うが、受入れ人数が4名と比較的少なく、グループとしてのまとまりが良かったこともプログラムの最後まで緊張感が保てた要因の一つであろう。また、これも冒頭部分で触れたことであるが、統括コーディネータの下に複数のサブ・コーディネータを配置し、よりきめ細かく学生に目を配れるようにしたことが大変に良かったのではないかと考える。今年度から導入した新しい受入・指導体制は以下の通りである。

統括コーディネータ：留学生センター長

専門教育担当サブ・コーディネータ：工学研究院留学生教育担当教員

日本語教育担当サブ・コーディネータ：留学生センター日本語教育部門教員

生活指導等担当サブ・コーディネータ：留学生センター指導部門教員

以下に各サブ・コーディネータの役割分担の概略を記す。

##### 専門教育担当サブ・コーディネータ

週に一度「ホームルーム」を開催し、専門基礎科目の学習進捗状況について確認するとともに、工学部進学に当たっての各種のアドバイスや指導を行う。

##### 日本語教育担当サブ・コーディネータ

日本語レベル判定テストの手配、受講クラス決定に際してのアドバイス及び日本語クラス受講開始後の学習進捗状況のチェックを行い、必要に応じて、日本語学習に係るアドバイスや指導を行う。

### 生活指導等担当サブ・コーディネータ

週に一度「日本文化・日本事情」のクラスを開講し、日本の文化や社会、制度や習慣を紹介しつつ学生の日本社会／九州大学への適応を助ける。また、必要に応じて、生活上のアドバイスを与える。

上記の受入・指導体制が今回うまく機能したと判断されることから、次年度も同様の体制で日韓プログラム生の受入・指導を行うことが提案され、すでに留学生教員会議で承認されている。次年度は、昨年度並みに戻って、7名の受け入れが予定されているので、本体制が本当にうまく機能するかどうかを試される年になるであろうと思われる。

## 6. 問題点と今後の展望

本プログラムは日韓両政府の合意により10年間の予定で2000年に開始されたものである。当初に計画・合意された10年間で2年後に終了することを受けて、昨年、両政府間で今後の見通しについて協議が行われ、第1期10年の実施延長が決められた。しかし、残念ながら、このことは本プログラムがこれまで順風満帆に運営されてきたということを示すものではない。岡崎(2006)で報告された問題点は依然としてその大部分が解決されないままに残されており、本プログラムに採択される韓国留学生と、その学生を受け入れる日本の大学にとって「厳しい」状況は当分続くものと思われる。

以下では去る7月20日に大阪大学で開催された本プログラムに関わる協議会<sup>3</sup>において文部科学省高等教育局、韓国国際教育振興院、並びに本プログラム修了生の代表からなされた報告を要約する形で、問題点と今後の展望を概観する。

選抜方法について、改めて文部科学省から以下のような説明があった。

- 6月 選抜候補者(500人)について高校からの推薦締切
- 8月 筆記試験にて(500人から)150人を選抜
- 9月 面接試験にて(150人から)100人を選抜
- 10月 日本側各大学へ受入れ照会
- 11月 最終合格者発表

上記の筆記試験の作成及び面接の実施は文部科学省が行っており、実際に学生を受入れることとなる大学の意向が反映されることはない。また、進学先の決定に当たっては、学生本人の希望を聞いた上で、文部科学省が「調整」をして決定しており、ここでも受入大学の意向が反映されるシステムにはなっていない。

予備教育受講不良者の取り扱いについては、韓国での予備教育期間中の場合であれば、すでに昨年度から「退学(除籍)」を含めた厳しい措置をとることが決定されているが、日本での予備教育期間中の場合に関しては未だ検討中であり、モチベーションが下がってしまった、あるいは日本や大学生活への適応がうまくいかなかった等の理由から予備教育が十全に終了しなかった学生も、そのまま学部へ進学してしまうという問題は積み残されたままである。

また、学部進学後の学業成績不良等により標準修業年限内での卒業が難しい学生については、今後、

文部科学省が受入れ各大学から情報を収集した上で韓国側と話し合い、今後の方針を決めたいということで、現段階では何も具体策は示されていない。当面は日本各地の韓国教育院が受入れ大学と連携して学部進学後の学生の管理・監督を「強化」していくということが韓国側との協議で決定しているだけである。<sup>4</sup>

現在、大学院に進学、在籍している本プログラムの修了生からは、学生側からの意見・要望として、以下のことが指摘された。<sup>5</sup>

- ・ 先輩 / 後輩の間でもっと「進学、就職、奨学金、兵役等々」に関する情報交換ができるよう仕組みを考えて欲しい。<sup>6</sup>
- ・ 大学院進学に際して、奨学金制度を設けて欲しい。<sup>7</sup>
- ・ 兵役につく時期について考慮して欲しい。<sup>8</sup>

一部の日本の大学からは「日韓プログラム生を受入れることは、日本の大学の役に立っているのか？」ということが改めて問われるべきだとの声も上げられており、そうした視点も含めて、本プログラムの今後の推移について注意深く見守っていきたい。

#### 【引用・参考文献】

岡崎智己（2006）「日韓共同理工系学部留学生プログラム」『留学生センター紀第14号』

岡崎智己（2007）「日韓共同理工系学部留学生プログラム2005年度（6期生）実施の概要」『留学生センター紀要第15号』

Lee, Misuk（2007）*The Evaluation of the Program by the Government of Korea*, 『平成19年度日韓共同理工系学部留学生事業協議会資料』

#### 【注】

- 1 事実、本報告書作成時点ですでに判明している2007年度（第8期生）における本学への進学希望者数は7名である。
- 2 作年度、一昨年度の報告書で専門基礎科目・数学の担当部局を数理学研究院ではなく、誤って理学研究院と記載してきた。関係者に対して深くお詫びするとともに訂正させていただく。
- 3 平成19年度日韓共同理工系学部
- 4 これに関連して、今年度から国費留学生が留年した場合には奨学金の打切りが決定したが、日韓プログラム生に対しては、当面は適用されないとのことである。なお、日韓プログラム生（全国で約100名）のうち、毎年平均して12%の学生が「留年」しているとのことである。
- 5 1期生、並びに3期生で現在大阪大学大学院に在籍。
- 6 学生自身による同窓会設立の動きもあるように聞いている。
- 7 すでに韓国の企業数社が大学院進学者に奨学金を提供し始めているとのことである。
- 8 学部在学中に兵役に就くことは実質できない状況は改善されていない。

# 日本語・日本文化研修コース

清水 百合\*

## 1. はじめに

九州大学留学生センターの日本語・日本文化研修コースは、海外の大学で日本語や日本文化を専攻した学生が1年間日本の大学に留学し、今後の日本研究に必要な日本語能力の向上を図るとともに、日本の社会や文化に関する理解を深める目的で、全国の大学が受け入れているコースの一端を担うものである。

## 2. 概要

平成12年度から日本語・日本文化研修生は一括して留学生センターが受け入れを行っており、現在までの受け入れ人数は以下の通りである。

平成12-13(00-01)年度1期生	5名	平成13-14(01-02)年度2期生	2名
平成14-15(02-03)年度3期生	2名	平成15-16(03-04)年度4期生	9名
平成16-17(04-05)年度5期生	15名	平成17-18(05-06)年度6期生	10名
平成18-19(06-07)年度7期生	21名	平成19-20(07-08)年度8期生	20名

以下は、平成18年度のコースの概要である。

1. 受け入れ期間 その年の10月1日から翌年の7月31日まで  
(受け入れ期間は6期生が10か月、7期生からは12か月となった)
2. コースの内容
  - a) 必修科目 18単位 420時間 留学生センターで開講の「日本語(上級)」、「日本語・日本文化概論」、「日本語学」および「日本語教育学」など
  - b) 選択科目 4単位 60時間 学部で開講の日本の社会や文化に関する学部学生向けの授業  
計 22単位 480時間
3. 課題研究 研修生各自が日本の社会や文化に関するテーマを設定し、指導教員による個別指導を受け論文にまとめる。
4. 単位認定 本コースで履修した科目は、成績認定が行われ、所定の要件を満たすと修了証が授与される。また単位互換に応じることができる。

---

\*九州大学留学生センター教授

### 3. 平成18年度の日本語・日本文化研修コース

1) 平成18年度前半：平成17年度に始まった第6期生(10名)のコースが引き続き4月から7月まで行われた。主な日程は以下の通りである。

2006年4月3日 授業開始

4月7日 課題研究中間発表

7月19日 課題研究最終発表会

1. 韓国人と日本人の考え方の相違  
朴 民哲 / 韓国・ソウル大学校
2. 日本料理の季節感はなくなったのか  
ワONGシリシヨン・カナウット / タイ・チュラロンコーン大学
3. 日本人の若者の目で見ると中国のイメージ  
胡 蓉 / 中国・南京大学
4. 萌える彼らがキター!! - 「おたく」とは何か  
金 旻志 / 韓国・慶北大学
5. 日本社会におけるネット心中について  
李 珍雅 / 韓国・慶北大学
6. 日本のひきこもり現象  
呉 寶麟 / 香港・香港城市大学
7. カーキ色が流行している or 自衛隊は軍隊であるのか、ではないのか  
トゥルパコワ・ユーリア / ベラルーシ・ベラルーシ国立大学
8. 桜井和寿の歌詞における比喻表現  
ブディ・ハルトノ / インドネシア・インドネシア大学
9. 中国人日本語学習者にとっての漢字語習得上の問題点について  
韓 秋燕 / 中国・南京大学
10. 韓・日における漢字音について - 両国の漢字音の類似性から -  
崔 峻赫 / 韓国・慶北大学

以上の発表は、論集として『平成17年度日本語・日本文化研修コース(第6期生) 課題研究論文集』(総ページ数182ページ)にまとめられた。ただし課題研究の単位が取得できなかった研修生の論文は載せていない。

7月21日 終了式・パーティ

2) 平成18年度後半：平成18 - 19年度コース(第7期生)は10月に21名の研修生で始まった。

10月12日 開講式

10月13日 授業開始

## 平成18年秋学期時間割り(コースの必修科目のみ記載)

	月	火	水	木	金
1		上級日本語 1	上級日本語 2	日本語日本文化概論	上級日本語 5
2					
3		日本語学	上級日本語 3	上級日本語 4	上級日本語 6
4					
5					

上級日本語は、上記の6科目の中から研修生が関心のある科目を4つ選択する。科目名は以下の通りである。

- 上級日本語 1 「日本人の横顔」
- 上級日本語 2 「マンガで学ぶ日本語と日本社会」
- 上級日本語 3 「現代日本の姿」
- 上級日本語 4 「社会問題に見る日本社会」
- 上級日本語 5 「人と社会を考える」
- 上級日本語 6 「日本語と日本社会を学ぶ」
- 11月17日 見学旅行 熊本城 阿蘇 黒川温泉
- 12月23日から1月11日まで冬休み
- 2月9日 前期授業終了
- 2月15日から春休み

## 4. 研修生の評価

## 1) 第6期生

例年、コース評価は主に上級日本語のクラスと課題研究の指導について聞いている。今年度もまた研修生全員がはっきり問題と指摘するものはない。これはどこの大学においても日本語・日本文化研修生の特徴だと思われるが、研修生はそれぞれの母国で日本語を勉強して来ており、その内容や方法については全く異なっている。必然的に九州大学での日本語のクラスに期待するものも異なる。とはいえ6期生は、総じて真面目な学生であり、与えられた課題はとにかく全力を尽くしてやろうという気概に満ちていた。であるから、どんなクラスであっても、多少の勉強しにくい環境は度外視して、自分ができることはしようとしていた。それでも問題として挙げられたのは、一つには学部の講義についてであった。内容があまりに概論的で退屈である事、担当の先生に熱意が感じられない事などが挙げられた。留学生センターの日本語の授業の位置付けは、学生の課題研究が効率良くできるように日本語の力をつけることと同時に学部講義の受講を助ける意味合いもあるので、目標となるべき学部の講義において得るものが少ないと、がんばろうという気持ちが削がれる。もちろん、学部の講義では他の日本人の学生と話せたとか、聞く練習がたくさんできたという評価はあるので、一概に意味がないとは言えない。今後、どの講義は研修生には得るものが多いかを調べ、受講を決める際の指導の

糧としたい。

## 2) 第7期生

7期生は、日本語の能力の高いグループであった。それだけに自負心も高く、日本語が「できない」あるいは「難しい」という状況は受け入れがたいようであった。特に母国での日本語の授業をあるべき日本語の授業の姿と強くイメージしている研修生には、留学生センターで授業の準備として出される宿題の量は、母国で慣れている量あるいは単に予想した量より多かつたらしく、宿題の量や難しさが問題であるとした回答が多かった。

しかし7期生は日本語の能力は高いが、それに比べて思考力は決して高いとは言えなかった。それゆえ課題に関しても、自分達は理解はできるが思考ができないという状況を認識するのに時間がかかった。研修生が自分の学習能力を総体的に判断することができないと、努力をする方向性が定められず、学習の効果も上がらない。このような研修生に対して、コーディネーターとしての指導が難しかった。結局、自覚した研修生には手を差し伸べることができたが、無気力になった研修生に対しては何もできなかった。これは適応に関わる問題だと思われるが、不適応に対して「何をどのようにすればいいか考える」手段となるべきヒントをもう少し与えられたらよかった。

## 5. 第7期で行った改良

6期生に比べて日本語の能力が高く、まとまりもよかったので、おおまかなガイダンスに止め、後は研修生の裁量に任せ、コーディネーターとしては個別対応に終始した。それにより自主性のある研修生は、どんどん計画をたてて関心の域を拡げて行ったが、そうでない研修生には何をどうしたらよいか分からないで身動きがとれず、困難な状況が続いた。日本語・日本文化研修コースのように研修生により希望が著しく異なるコースでは、基本的に研修生の裁量に任せる事が理想的だが、そのような状況で決められない研修生もいる。それは各人の性格の違いもさることながら、母国での大学における教師と学生の関係のあり方に影響されているとも言える。基本的には今後もこの研修生の裁量の域を広く設けたく思っているが、それとともにコーディネーターとしてどのように個別対応していくかが大きな課題である。

## 6. 日本語・日本文化研修コースの課題

日本語・日本文化研修生は、毎年コースを構成する研修生の性格や能力により、異なった反応や異なる速度での成長を見せるため、一貫した対応方法を確立するのが難しい。本年度に関して言えば、もう少し早い段階で自分の意見がはっきり表現できる事を評価するという教員側の判断基準を分らせる事ができたら、一層の学習効果が上がったのではないかという反省がある。

学生は教員の評価に敏感ではあるが、それがどの程度の深さで理解されたものかを見極める必要があり、そして浅いものに対してはあくまでも個別に対応し、深めていくプロセスに対する努力が課題研究を担当する教員には必要である。

# 九州大学におけるサマーコースの実践

## 2007年プログラム実施報告

### Report on the 2007 Asia in Today's World (ATW) Program

岡崎 智己\*

高原 芳枝\*\*

西原 暁子\*\*\*

#### 0. はじめに

Asia in Today's World (ATW)プログラムは、2007年で通算7回目の開講・実施となった。過去7年間に受入れた留学生は713カ国53大学258人に上る。

本稿では、2007年プログラムの概要を述べると共に、今年度プログラムの問題点とその改善策について考察する。

#### 1. 2007年ATWプログラムの概要

実施期間	2007年7月2日～8月10日(6週間)
対象者	外国の高等教育機関に在籍している学部生及び大学院生で、以下の条件を満たすもの。 (1) 学業及び人格が優れており、原則として在籍している大学の推薦を受けた者 (2) 留学の目的及び計画が明確で、日本への留学の成果が期待できる者 (3) 日本での留学期間終了後、在籍大学において学業を継続する者 英語を母国語としない者については、TOEFL550点以上の英語能力を有する者
開講科目	1) 人文・社会科学系「アジア研究コース」全4科目(教育言語:英語) 2) 自然科学系「実験実習コース」個別対応(教育言語:主に英語) 3) 日本語(初級前半～中級後半・全4レベル) 4) 日本語ワークショップ(希望者から別途受講料を徴収して登録制で実施)

\*九州大学留学生センター教授

\*\*九州大学国際交流推進室准助教

\*\*\*九州大学国際交流推進室准助教

時 間 割	日本語 1 ( 9 : 00 - 9 : 50 ) 日本語 2 ( 10 : 00 - 10 : 50 ) 日本語 3 ( 11 : 00 - 11 : 50 )		注) 日本語クラス：後半 3 週間は 10 : 00 開始。アジア研究：科目によっては講師の都合により午後 2 コマ行う場合あり。
	アジア研究 13 : 00 - 14 : 30 ( 14 : 50 - 16 : 20 )	実験実習 13 : 00 ~	
	ワークショップ ( 15 : 10 - 16 : 40 )		
奨 学 金	12万円 / 人を 18 名に支給		
見学旅行 (登録制)	1) 佐賀県西有田町 棚田農作業体験 (日帰り) 2) 錦帯橋、厳島神社、広島平和記念公園 ( 1 泊 ) 3) 日本文化体験 (茶会・座禅) (半日)		
宿 舎	以下の組み合わせにより希望をとり、調整して割り当てた。 1) 4 週間ウィークリーマンション + 2 週間ホームステイ 2) 全期間ウィークリーマンション 3) 4 週間民間学生寮 + 2 週間ホームステイ 4) 全期間 ( 6 週間 ) 民間学生寮 5) 全期間ホームステイ		
参 加 費	171,800円 ~ 255,400円 (旅費を除く) 別途：日本語ワークショップ登録料 (110,000円)		

## 2. 参加者数

2007年の応募者、並びに受講者 (= 受講許可者の内、実際にプログラムに参加した者) の国別内訳は以下のとおりである。

応募者総数	受入許可者総数	受講者総数
77人	66人	49人

(単位：人)

アメリカ	カナダ	韓国	シンガポール	台湾	中国	香港	フィリピン	アルゼンチン	計
12	1	9	15	3	3	1	4	1	49

## 3. 開講科目

人文・社会科学系「アジア研究コース」の開講科目と各科目の受講状況  
各科目とも、授業回数は14回 (30時間相当) で、2単位とした。

「アジア研究コース」 開講科目・授業担当		受講生数
Japan and Asia-Pacific in Modern Times See Heng Teow, National University of Singapore		28人
Globalized Japan in Transnational Asia Shun Ohno, Kyushu University		19人
‘Asia’ in the Imagination of Modern and Contemporary Japan Reiko Ogawa, Kyushu University		23人
Death in Traditional Japanese Literature Noel J. Pinnington, University of Arizona		24人

自然科学系「実験実習コース」に申請して行われた自主研究と受入部局  
6週間の期間中ほぼ毎日実験実習に従事するコースとして、4単位相当とした。

「実験実習コース」自主研究課題タイトル	受入部局
Nanotubes Honeycomb Structures	工学研究院
Purification and Characterization of Pediocin PA-1 produced by Lactic Acid Bacteria Isolated from Philippine Water Buffalo	農学研究院

#### 日本語コースの受講状況

6週間の期間中ほぼ毎日授業を行い（授業時間総計60時間）、2単位を認定した。

初級1	初級2	初中級1	初中級2	中級1	中級2	計
6人	6人	9人	11人	10人	7人	49人

#### 日本語ワークショップ受講状況

ワークショップはプログラムの教科課程の外に、約40時間の集中講座として設けており、単位は認定していない。2007年の受講者は6人であった。

#### 4. A T Wプログラム / 九州大学サマーコースに対する評価と今後の課題

##### 参加者による開講科目とプログラム全般の評価

- ・「アジア研究コース」について（有効回答者数：44人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	7人	19人	18人	0人	0人

- ・「実験実習コース」について（有効回答者数：2人）

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	2人	0人	0人	0人	0人

- ・「日本語コース」について (有効回答者数：44人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	17人	24人	5人	0人	0人

- ・「日本語クラス」と「アジア研究コース」あるいは「実験実習コース」とのバランスについて (有効回答者数：46人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	10人	22人	13人	1人	0人

- ・プログラムの総合的な評価 (有効回答者数：44人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	23人	21人	0人	0人	0人

総合評価は全参加者 (49名) の90%が“大変によい”または“よい”と回答しており、例年同様、参加者に満足度の高いプログラムを提供できていると言える。

昨年の評価に比較して変化が見られるのは「アジア研究コース」について、「ふつう」と回答した割合が増加している点である。(2006年度の評価では、「大変によい」14、「よい」18、「ふつう」1、「少し劣る」0、「劣る」0：有効回答者数33人)

これに関して、数人の受講者から「(今年提供されたアジア研究コースのうち) 2つのコースが内容的に類似していた」、「もっとバラエティーのあるコース構成 / 内容としてはどうか」という意見が出されており、来年以降、アジア研究コースの編成 / 内容を考える上で参考としたい。

#### 参加者によるホームステイとチューターの評価

- ・ホームステイの評価 (有効回答者数：30人)

立地	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	7人	15人	6人	2人	0人

待遇	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	26人	3人	1人	1人	0人

- ・チューターの評価 (有効回答者数：40人)

	大変によい	よい	ふつう	少し劣る	劣る
回答者数	28人	11人	1人	0人	0人

今年度のサマーコースのホームステイ実施に当たっては以下の2点で、これまでのものと異なっている。

## 1. 受入期間の一部変更

必要となるホストファミリーを数的に確保することが難しくなっていることから、過去2年間は全期間 (= 6週間)、もしくは後半3週間の受入で実施していたものを、後半3週間を2週間に短縮して実施した。そもそもサマーコース開始当初は2週間の受入でホームステイを実施しており、3週間の設定は2005年度から始めたものである。しかし、以前に2週間の受入を行ったホストファミリーからは3週間の受け入れはやや長いと感じられ、抵抗があって応募を見送ったという声が聞かれたことから、当初の設定期間 (= 2週間) に戻したものである。

結果として、参加学生数を超えるホストファミリーの応募を得ることができた。また、参加学生に対しておこなった来日前の指導により、積極的にホストファミリーとの交流をはかる意欲を持った学生がホームステイに登録したことも手伝って、交流は概ねスムーズに行われ、学生、ファミリー双方から高い満足度が示された。<sup>1</sup>

## 2. ホームステイ謝金の傾斜設定

ホームステイ先は、大学へ徒歩で通えるケースもあれば、複数の交通機関を利用して1時間ほど通学に要するケースもあり、立地の差異による通学時間と交通費の格差が学生に不公平感を感じさせる要因となっていた。今年度はこの点を是正するため、各家庭から大学までの通学に要する交通費に応じて、学生が支払うホームステイ料金に逆の傾斜をつけ、ホームステイ料金と通学費用の総額においてホームステイをする学生間に大きな差が生じないようにしてみた。ホストファミリーに対しては、募集の段階から事情を説明し、傾斜を設けた金額 (= 謝金) 表を提示しておいたため、実施に当たって特段のクレームは無かった。

## 問題点と今後の課題

プログラム実施中には毎年何らかの問題が持ち上がるものであるが、今年はある学生の自己都合による1週間の欠席と早期帰国が問題となった。

A T Wは登録した各コースへの85%以上の出席と開講式と閉講式への出席を修了要件としており、この出席に関する規則を申請書に添付して申請者の注意を促している。また、申請書にプログラムの最初から最後まで参加するかどうか質問を設け、申請者には“ Yes ” が “ No ” で答えてもらい、プログラム参加者を選考する際の参考としている。だが、問題の学生は、期間中1週間授業を欠席して日本に住む親戚に会いに出かけ、戻ってきたかと思うとその3日後に、就職面接のためという理由で早期帰国してしまった。この学生は、申請時には出席に関する質問に全期間出席できると回答しており、且A T Wが出席に厳密であることを十分に理解していたが、最終的にはA T Wを修了することよりも自己の都合を優先させる決断をし、その旨を一方向的にスタッフにメールで伝えてきた。

グループダイナミクスの観点からして、一部の参加者のこのような行動を放置することはプログラムに参加した学生全体に悪い影響を及ぼすことが憂慮されたし、参加したものの出入りは自由という状況が許されれば、そもそもプログラムを運営すること自体、意味をなさなくなってしまうことが懸念された。プログラム参加者の多くが“自己都合”で規則を無視して勝手に欠席するようなことが続け

ば、プログラムの質保証が困難となることは必須であり、そのような事態を避けるための処置を施すことが必要であろう。そこで現在、来年度プログラムからは正当な理由によらない欠席者に対する除籍規則の導入を検討している。

**【注】**

- 1 ホストファミリーに対して行われたアンケート中の質問項目「留学生とのコミュニケーション」については回答者全員が「とてもよかった」を選択している。

# JTWプログラム 2005-2007

今井亮一\*

## 1 はじめに

本稿では、2005年10月から2007年11月にわたる、Japan in Today's World (JTW) プログラムの実施状況の概要を報告し、課題の考察を行う。当プログラムは、毎年10月に開講し、翌年7月に終了するというサイクルで運営されている。本稿では、2007年11月現在での事実を元に、現在進行中の14期を含む最近の3期の実施状況を報告する<sup>1</sup>。

## 2 概要

### 2.1 組織

JTWプログラムは、九州大学が責任をもって提供する「全学プログラム」であり、「留学生センター委員会」が教務上の意思決定機関である。その下に、実施面の詳細を審議する「短期留学専門委員会」が置かれている。指導の実務は、留学生センターの「短期留学部門」に在籍する教授1名、助教授1名が、「JTWコーディネーター」として担当している。事務上の支援は、国際交流部が行っている。

### 2.2 沿革

JTWプログラムは、1994年(平成6年)10月に、米国大学生15名、韓国大学生3名の計18名を受け入れてスタートした。翌1995年にはすでに現在の規模に近い31名を受け入れている。以後年間30人弱を北米、ヨーロッパ、アジアから受け入れて実施してきたが、2004年開始の第11期から増員を開始し、現在では、例年45名前後が在籍している。原則として北米、ヨーロッパ、アジアから均等に学生を受け入れる計画で運営しているが、年度によって、変動している。近年の傾向として、地域的にはアジアの学生が増えている印象があったが、本年10月開始の14期では3地域からの受入人数がちょうどバランスしている。

---

\*九州大学留学生センター准教授。JTWプログラムコーディネーター。本稿で披瀝されている見解はすべて筆者のものであり、九州大学留学生センターの見解ではない。

#### 【注】

JTWのこれまでの実施状況については、第6期までについては九州大学留学生センター(2001)、第9期から第11期までについては今井(2006)に、それぞれ詳細な記述がある。筆者は、2002年9月着任のため、第7期、第8期の実施状況について情報を有しない。Pollack(2007)は、より広い国際的な視点から、短期留学プログラムの意義と九州大学における実践について論じている。

### 2.3 目的

JTWは、北米、ヨーロッパ、アジアからできるだけ偏りなく学生を受け入れ、期間1年にわたり指導している。当プログラムを構成する三つの柱は、英語による講義、自主研究 (Independent Study Program, ISP)、見学 (Field Study) であるが、これらを通じて、留学生が日本を幅広く理解し、日本に関する知識・情報を英語で世界に発信できる人材となることを期待している。

### 2.4 学事歴

JTWは10月初日に開講し、翌年2月末日に第1学期 (秋学期) を終了する。3月は春休みであり、4月に第2学期 (春学期) を開講し、7月末日に終了し、課程修了を認定する。各学期、4回程度のField Study という名前の研修小旅行 (日帰りまたは1泊) がある。学期末に、定期試験およびISP報告会が行われる。

## 3 プログラム内容

JTW は以下のような個別要素から構成されている。

- 1 授業科目
- 2 Independent Study Program (ISP)
- 3 Advanced Research Laboratory (ALR)
- 4 日本語科目
- 5 Field Study
- 6 Tutorship
- 7 Host Family Program

以下、それぞれについて順に説明する。

### 3.1 授業科目 (必修)

JTWの一年は、10月から2月までの秋学期、3月の春休み、4月から7月までの春学期から構成されている。各学期、8から10の英語による科目が開講されている。これは、広範な分野 (歴史、政治、経済、社会、文化、科学技術等) における、日本についての基礎的な知識を留学生に与えることを目的としている。我々の特色は、すべての科目を、英語を使用言語として提供することにある。講師は、英語で講義し、(基本的に) 英語の教材を用い、成績評価を英語で書かれた試験、レポート等に基づいて行う。学生の質問や討論もすべて英語で行われる。科目は、留学生センター専任教員のみならず、学内外の各分野の専門家が担当する。すべての科目は、全学に開放され、留学生のみならず、日本人学生も履修することができる。最近の科目一覧は表1を参照されたい。

授業の形式は、講義を中心としつつ、学生の積極的参加を意図してセミナー形式を部分的に取り入れている。以前 (第11期まで) は、形式上、科目は講義 (core course) とセミナー (advanced seminar) に分けられていたが、現在、この区別は撤廃されている。

3.2 Independent Study Program (ISP) (必修)  
 講義、セミナーと並び、ISP は、当プログラムの  
 の教学上の柱である。学内外の教員が指導教員と  
 なり、各学生が自主的に作成した研究計画に基づ  
 き研究を行う。目的は、日本社会に関する自発的  
 な問題意識の育成にあり、テーマは、人文社会系  
 の分野から選ばれることが多いが、理系の学生は、  
 日本の先端科学技術に関する文献的研究を選択す  
 ることもできる。研究成果は、所定の様式に基づ  
 き論文および口頭発表の形で全学に公開される。  
 第10期までは、半年間のみプロジェクトを認め  
 たが、第11期から原則1年間のプロジェクトを必  
 修としている。最近の研究課題の分布を、指導教  
 員の所属(研究院等)に基づいて円グラフで示し  
 た(図1a~図1c)。御覧のように、全学、全分野  
 からバランスよく協力していただいているが、規  
 模の拡大にとれない、留学生センター専任や学外  
 教員が指導する割合は低下しており、全学の協力  
 がJTWプログラムの充実にとってますます重要  
 であることがうかがわれるであろう。

3.3 Advanced Research Laboratory  
 (ALR) (選択)

JTW では、理科系学生のために、九州大学の  
 理工系研究院の研究室に所属し研究する機会を提  
 供している。これによって学生は、各学期1科目  
 の講義に相当する単位を取得できる。第10期まで  
 は、学生はISP、ALR のいずれかを選択するこ  
 とができたが、第11期より、ALR は選択科目と  
 なった。しかし、実際には、ALR を履修する学  
 生は、研究室に机と椅子を与えられ、日本人学生  
 と同様に、ほぼ毎日、終日研究に専念している。

3.4 日本語科目 (選択)

JTW 学生は、自らの水準に対応した、言語教  
 育としての日本語科目を履修し、日本語力を高め  
 ることができる。日本語科目は、留学生センター  
 の日本語部門によって提供されているので、ここ

表1：最近の開講科目(例)

人文学

- Adjusting to Japan
- Contemporary Japan and Popular Culture
- Cultural Evolution of Japan
- Enculturation and Education in Japan
- Gender in Contemporary Issue
- Japanese Cultural Patterns
- Japanese Life through Tea Ceremony
- Linguistic Description of Japanese
- Modern History of Japan

社会科学

- Contemporary Issues in Japanese Law
- Economic Development
- Japan-East Asian Relations
- Japan's Aid to Education in the  
Developing World
- Japanese Economic System
- Japanese Politics Today
- Macroeconomics and Japan
- Structural Reform of Japanese Economy
- Urban Sociology in Asia

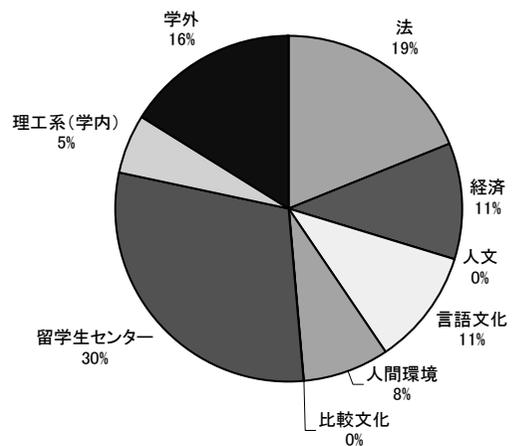


図1a：ISP 指導教員：2005-2006 (総数37)

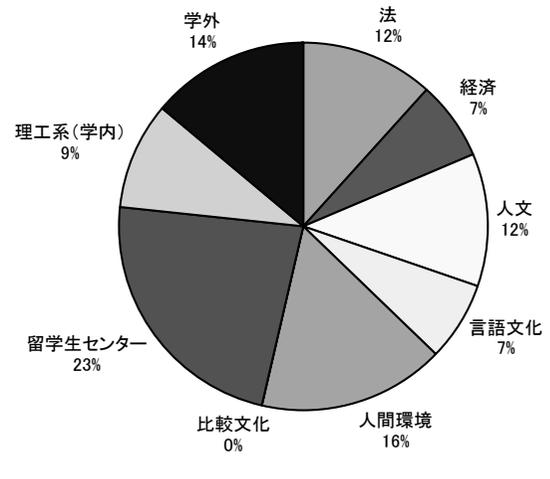
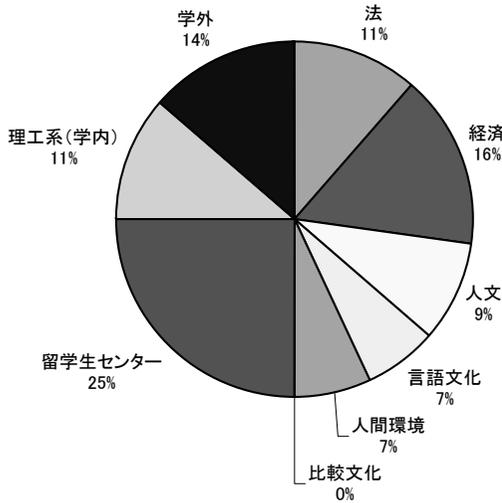


図1b : ISP 指導教員 : 2006-2007 (総数44)

図1c : ISP 指導教員 : 2007-2008 (総数45)

表 2 : Field Study 実施例

実施月	宿泊	訪 問 先	内 容
10	2 泊	九重高原、阿蘇山、熊本など	オリエンテーション、異文化理解セミナー
10	1 泊	西有田	稲刈り、有田焼
11	日帰り	大宰府	相撲部屋見学、天満宮、歴史
12	日帰り	福岡市内小学校	小学生との交流、教育制度
3	1 泊	別府	再オリエンテーション、温泉文化
4	日帰り	梅林寺 (久留米市)	座禅、仏教
5	日帰り	トヨタ九州	自動車工場見学
6	日帰り	博多座	歌舞伎鑑賞
6	1 泊	西有田	田植

では詳細な説明は行わない。

### 3.5 Field Study (選択)

JTWでは、留学生に日本社会の「現場」を体験してもらうために、見学旅行を実施している。訪問先は、史跡、学校、工場に始まり、田植/稲刈り、有田焼、座禅、茶の湯の体験にまで及ぶ。最近の実施例を表2に掲載してある。例年、学生からの評判に基づき、内容と時期の見直しを行っている。

このうち、開講時(10月)のオリエンテーションでは、「異文化理解セミナー」を行い、慣れない外国での学生生活への円滑な導入を図っている。また、秋学期終了時(2月ないし3月)の再オリエンテーションでは、学生から半年間の感想や注文を聞き、プログラムの改善に役立てている。これら二つのオリエンテーションは参加必須である。

### 3.6 Tutorship

JTWでは、全学からチューターを募り、JTW学生の修学・生活環境への適応を支援している。チューターとは別に、「日本語パートナー制度」があり、留学生には日本語力向上、日本人学生には外国語力向上の機会となっている

### 3.7 Host Family Program

学生の希望に応じて、Host Familyを斡旋し、週末や休暇期間中に日本人の家族と過ごす機会を提供している。

## 4 規模拡大の問題点と改革方向

JTWは現在、九州大学の国際化戦略の一環として、業務規模の拡大を図っている。第9期までは30人前後だったのが、最近では常時45人前後を受け容れている。これには、九州大学が学生交換協定を締結する外国大学が年々増えていることが最大の理由であるが、国内一般の大学受験で定員を設ければ必ずしも学生が来るわけではないことを考えれば、やはり、これは日本への留学熱の高さの反映と考えられる。これに伴い、様々な問題点が顕現しつつある。もちろん、多くの留学生をJTWとして受け入れることができれば、それに越したことはないわけであるが、現在のJTWの運営体制を前提とすれば、それは困難である。その理由を説明するとともに、改革の方向について若干の私案を提示する。

### 4.1 授業負担

まず、最大の課題として、英語で講義することの重い負担から、授業科目担当者を探すことが慢性的に困難となっている。欧米は言うまでもなく、平均的にみてアジアの大学ですら、英語による講義は幅広く行われており、学生の英語力も高い。これに対して、我が国の大学教員の平均的英語力は残念ながら非英語圏の標準から見てかなり低く、留学生の期待水準をクリアする英語力を駆使して講義できる人材の数は限られている。特に、文系の場合、英語で論文を書いたり外国の学会で発表したりするということが必ずしも一般的でない分野が多く、教員に高度の英語力を求めるのも酷である。しかるに、こういう純日本的な分野こそ、留学生の関心もまた高いのである。工学、自然科学や経済学など、英語使用頻度の高い分野では、英語で講義できる人材発掘は比較的容易であるが、これら学問を、わざわざ日本で学ぶ必要性は低い。一方、文学、歴史、社会、芸術、哲学・宗教・思想といった分野には、英語で講義できる人材は乏しいが、これらの学問を日本で学ぶ意義は非常に高い。また、これら比較的に世界に知られていない分野にこそ、世界共通語である英語を用いて情報発信できる人材の育成が重要であるともいえるのである。以上のような背景で、JTWでは、比較的少数のエキスパートたちに、毎年講義を依頼している状態である。

### 4.2 ISP指導教員の不足

同様の問題がISPにも発生している。もっとも、これは学生数の増加のみによるわけではない。平成17年度から、原則として1年間在籍するJTW学生は、通年でISPを履修しなければならないことになった。以前は、履修義務は半年で、希望者のみ通年で履修することができるという制度であっ

た。しかるに、原則通年への変更により、以前なら同じ教員が秋学期と春学期で異なる学生を指導できたのだが、それができなくなり、事実上、以前の倍の指導教員確保が必要となった、この間、学生数は1.5倍に増えたので、現在では、ほぼ $2 \times 1.5 = 3$  (倍)の指導教員が必要である。指導教員の依頼はJTWコーディネーターの仕事であるが、単に、報酬増なしで自分の仕事が3倍になったことを愚痴っているわけではない。本質的な問題は、45人全員に全学から指導教員として適切な教員を提供してもらうことは物理的に困難であると言いたいのである。

まず、単純に量的な問題を考えてみる。ISPというのは、ほとんどがいわゆる文系のテーマである。例年、5名程度は理系のテーマを選択するので、通常、40名ほどについて、全学から文系の教員をリクルートすることになる。文系のテーマとなると、大別して人文科学系と社会科学系に分かれる。前者には、文学・歴史学・言語学・芸術学などが、後者には法学、政治学、経済学、社会学、心理学などが、それぞれ含まれる。教員の所属先(研究院)で見れば、法学、経済、人文、人間環境、比較文化、言語文化が文系であるが、40名を均等に割り振るとすれば、これら6つの研究院が平均して7名前後の学生を受け入れなければならない。現実には、このように均等に学生を割り振るなどということもありえない。学生の希望によっては、特定の研究院に10名程度を要請しなければならないことも起こりうる。しかるに、それぞれの研究院の本務でもないことに、このような大きな人数を受け入れてもらうように要請することは無理である。

そこで、通常、10人をJTWコーディネーターが引き受けるとともに、残り7、8名をJTWに対し長期間にわたり協力している学外非常勤(外国人)教員2名に指導してもらっている。これedyouやく、九州大学の文系研究院に依頼する学生数は、何とか20名強に抑えられる。各研究院平均4名ぐらいいれば、無理な数字ではない。しかし、この場合、2人のJTWコーディネーターはそれぞれ5名程度の学生を指導しており、拡大解釈しても専門外のテーマの学生まで指導しなければならない状態に陥っていることは、大学教育の質の維持という課題に照らして問題がないわけではない。

次に、質的な問題を述べる。九州大学は、一応、それぞれの専門分野において、国内では優秀な研究者が教員として採用されていると思われる。しかしながら、そのことは、日本語力を前提として受け入れられたわけではないJTW学生を指導できることを、必ずしも意味しない。

学生が来日すると、指導教員の研究室までコーディネーター学生を連れて行き、面接をしてもらう。その目的はもちろん、指導教員に、学生の予備知識、能力、意欲などを面接を通じて判断し、受け入れるかどうか決めてもらうことにあるが、それだけではない。学生と指導教員の問答を観察して、学生と教員の相性を慎重に判断することも、重要な目的である。単に学生を引き合わせておしまい、というような無責任なことは一切していない。学生との問答が英語でスムーズに行われていないと判断された場合には、丁寧に謝辞を述べ、他の教員を探すことになる。

一方、単に英語のできる教員を探せばよい、というわけでもない。多くの留学生は、できるだけ日本語を話したいと思っている。ISPは、留学生による日本研究の成果を、世界に通用する言語、つまり英語で報告することを目的としているが、指導は別に日本語でもかまわない。日本語が堪能に使いこなせる学生であれば、むしろ日本語で指導してもらった方が学生は満足する。例えば日本史や日本文学のような分野では、教員が英語を話さなくても、学生が十分に日本語を理解できる状態であれ

ば、指導を依頼している。実際、多くの日本語ができる学生が、主として人文系の研究室に受け入れられ、日本人学生とほぼ同様の扱いを受けたことに大いに満足して、プログラムを修了している。

いずれにしても、現在のJTWの在籍者数は、およそ全学（文系）に継続的に協力を依頼できる上限に達している。これ以上のJTW規模拡大には、新たな体制を九州大学として構築しなければならないと思われる。次項ではその議論に移る。

#### 4.3 JTW規模拡大にともなうISPの「ゼミ」化

現在、JTWは、教授1名、准教授1名から成るコーディネーター2名と、事務職員2名によって運営されている。2人の事務職員は、九大の正規職員であり、組織上事務部門に所属し、事務が定めたJTWの仕事の範囲でコーディネーターに協力する。

通常、コーディネーターは各学期2科目講義し、常時5名前後の学生をISP指導している。各学期、8科目から10科目の英語による講義（JTW Core Courses）が開講されているが、そのうち4つがコーディネーターによって教えられ、4科目から6科目が学内・学外の非常勤講師によって担当されている。以下では、何らかの改革によって、JTWの規模を現在の45人程度からさらに60人、80人へと拡大できるかどうかを考えてみる。

現在、九州大学の伊都キャンパスへの移転にともない、様々な改革が執行部や全学の代表者によって議論されているようである。あまり仮定の話をして意味ないのであるが、例えば、JTWの運営を本務とする専任教員が増え、英語による講義をすべて、JTWとして自己完結的に提供できるようになったとする。具体的には、専任が倍増され4人となり、1人2科目持てば、8科目を提供できる。

この体制でISPはどうなるだろうか。現状と同様、専任教員が5名ずつ学生を持てば、20名の学生を指導できる。しかし、残りの学生の指導は全学の教員に依頼しなければならない。残りは、総数が60名なら40名、総数80名であれば60名である。先に述べたように、全学に安定的に協力を期待できる依頼数の上限は20名強である。つまり、JTW専任教員を増やしても、現在のISPの実施形態では、規模を飛躍的に拡大することはできない。

規模拡大を可能にするもっとも容易な方法は、ISP履修義務の短縮、すなわち以前のように半年に戻すか、より抜本的には、ISPを必須でない選択科目にするか、廃止することであろう。

このような安易過ぎる選択肢を取らないとすれば、どうなるか。筆者が有望な選択肢の一つとして提案したいのは、ISPの「ゼミ化」である。

周知のように、多くの日本の大学の文系学部では、「ゼミ」（セミナー、ゼミナール）と呼ばれる少人数の演習が開講され、多くの学生が継続的に参加し、事実上、初等中等教育におけるクラスと同様の機能を、大学教育において果たしている。期間や規模は大学によって異なるが、だいたい2年生、3年生から参加し、卒業まで在籍するようである。規模は、私立大学で2年生から参加するような場合には50名を超えることもあるが、有力国立大学では、3年生、4年生合わせて20名ぐらいが普通のようなようだ。最近では「1年生ゼミ」を設ける大学も多い。入学したばかりの学生に大学での勉強の仕方を教えるのが目的らしく、通例、2年次以上参加するゼミとは切り離されて運営されている。

ゼミは、日本の文系学部では少人数指導の根幹を成している。場合によって数百人に達する大教室でのマスプロ授業ばかりで、教員による個人指導や学生同士でお互いの意見を闘わせる機会が乏しい

文系学部では、それらを補う意味でゼミが設けられているのだが、留学生にとっても、日本の大学に在籍するという経験の一部として、日本的「ゼミ」への参加は非常に貴重な機会なのではないだろうか。

I S Pのゼミ化にあたり、現行の1対1指導のI S Pを廃止する必要は必ずしもない。そもそも、このゼミ化のアイデアは、5人以上の学生のI S Pを指導する(コーディネーターでない)教員から、一度提案されたことがある。この提案は、個人指導を掲げるI S P実施規則との齟齬から、採用されなかった。しかし、規模拡大にともない、厳密な意味での英語による個人指導の維持は、いずれ物理的に不可能となる。個人指導のタテマエを維持しつつ、最終的に5名以上の学生を受け入れざるを得なかった教員には、グループ指導の形でI S Pを行うことを認めるということでもかまわない。

実際には、個人指導よりグループ指導の方が、教員と学生が会う機会は多くなると思われる。原則として週1の割合でゼミを開講するならば、ゼミは学生の生活指導の単位としても機能する。ゼミの指導教員には当然、学生の出席状況を把握し必要な指導を行い、逸脱行動が目立つようであればJ T Wコーディネーターに報告するように義務付ける。グループ指導には、第三者による監視というメリットもある。教員と学生の1対1の関係では、それぞれがやる気をなくせば、ろくろく会ってなくても却ってその方がお互いに都合がよく、実質的な指導が行われずに形式的に単位が認定されるということになっても、問題として露見することはない。これに対し、ゼミでは、教員がゼミを無断で欠席できないことはもちろんだが、学生も、他の学生の目があれば怠けることは難しいだろう。規則的な参加にとって、同輩の視線の方が教員の注意より有効な規律(discipline)効果を発揮することは大いにありうる。もちろんゼミの指導は教員の授業ノルマの一つとして計算する。

I S Pのゼミ化は、講義科目全体の改革と一体化して行わなければならない。例えば、講義10科目をすべて専任教員5人が分担して提供することは、必ずしも学生の興味関心とは一致しない。学生は、同じ教員の科目は一つ取れば十分で、いくつも取りたがらないものである。いろいろ工夫を凝らしても、1人の教員が教える科目には、似たり寄ったりなところがあるからだ。同じ教員が何度も出て来ることは、学生にとって退屈だ。できれば10科目全部違う教員が教えた方がよい。そこで、例えば2限と3限はCore Coursesの時間とし、Field Study(見学旅行)のために現在も空けてある月曜日を除く、火曜日~金曜日の8コマに8科目を配置し、専任が4名であればそのうち4科目を教えて、残りは引き続き学内外の協力で開講するのがよい。そして、4限と5限をゼミの時間とし、4名の専任に加えて複数の学内外教員がゼミを開講するのである。仮に8コマのゼミを開講することができれば、1ゼミ10人なら80名(!)の学生を吸収できる。

学生のゼミ選択も、従来のように学生が来日前に研究計画書を提出し、それにしたがってコーディネーターが振り分けるのではなく、学期開始後に、ゼミ教員が掲げる指導計画を見て、学生が応募すべきである。十分なバラエティを確保するために、ゼミは8コマ程度開講すべきである。実は、現状でも、事前に提出されたI S P研究計画書にしたがって、全員が研究しているわけではない。多くの学生が、来日後にテーマの変更を希望し、それにともない割り当てられる指導教員も変わる。また指導教員決定後も、当初提出した計画書から専門的にも全く乖離した研究をする学生さえいるのである。このような学生と教員のミスマッチは、教員が掲示したゼミ計画書を見て学生が応募することによ

て、相当解消すると思われる。

ところで、現在の45名前後の規模では、JTWの講義のいくつかはすでに、実質的にゼミのようになっている。講義によっては30名近い登録者がいるところもあるが、少ないところは10名前後である。登録者10名なら、学生の発表中心に構成したゼミ形式の講義ができる。しかし、登録者が20名を超えると、もうゼミらしい運営はできず、教員の一方的な講義となる。今のところ、まだ規模の小さいクラスもあるので、学生発表中心のセミナー的な授業が行われているが、規模が拡大すれば、学生が自由に登録でき受講者数を制限しない科目はすべて、教員による一方的な講義となるだろう。そうなれば、いずれにしてもセミナー形式を、受講者数制限を付けて、制度として復活する必要があるだろう。

ゼミ形式への移行にあたり失われるものがないわけではない。現状では、学生が提出した研究計画書にしたがって指導教員を探すので、思いがけない分野の専門家から協力をしてもらうことも多いのである。一方、ゼミ形式となると、あらかじめ提供された選択肢の中から学生が選択することになることから、内容的には固定的となる。もっとも、多くの学生はパターン化されたテーマを選んでおり、そういう場合は1人の教員がまとめて指導しても、複数の教員が分担して指導しても、実質的な違いはない。例外的にきわめてユニークなテーマを選ぶ学生がいるが、JTWのパラエティを広げる意味で、そういう学生の希望にできるだけ答えていきたいと思う。しかし、そういう特殊なテーマは、それ以降の年に外の学生から希望されることはなく、獲得した貴重な協力は一時的なものにとどまることほとんどなのである。

実際、パターン化された人気テーマというのは、けっこうあるものである。例えば、現行の講義負担では、コーディネーターが引き受けることができるISP学生数の物理的上限は5名である。しかし、講義負担2科目のうち1科目をゼミとし、ゼミ指導をISP指導と兼ねることができれば、より多くの学生を指導することができる。パターン化された人気テーマの場合、本当は1人の教員が全員を指導した方が効率的であり、学生にとっても幸福であるのに、5人という上限のため、やや力量の劣る（とコーディネーターは判断する）他の教員に指導してもらわざるを得ないことになる場合も多いのである。

なお「JTWゼミ」には、英語力の基準をクリアした学生が参加してもよいと思う。JTW学生は常に、日本人学生や地域社会と隔離されているのではなく、できるだけ交流したいと考えている。JTWは本来、自己完結的なプログラムではなく、全学からの広範な協力の上に運営されるべきである。また、日本人学生の参加は、留学生にとって益があるだけでなく、英語を使って留学生とともに勉強することを通じて、日本人学生に国際社会で活躍できる人材として成長する一つの機会を提供することになるだろう。

#### 4.4 事務制度上の問題

最後に、事務的な問題点をいくつか指摘しておきたい。ISP指導にかかる厄介な制約の1つは、謝金の支給基準である。現状では、指導時間1時間あたりの謝金単価が決まっていて、規則で定める時間だけ指導したとみなして謝金を支払っている。しかし、本来重要なことは時間ではなく、実質的な指導を受けることである。世間では労働者のホワイトカラー・エグゼンプションの導入が政策課題として議論されているが、大学教員はすでに裁量労働者であり、ISPの指導謝金は定額（手当て）

でよいのではないか。この指導時間規制があるために、多様な指導方法、例えばグループ形式などが実現できなくなっているという事情がある。例えば、5人の学生を引き受けることは、紙の上では80時間指導することになり、3科目近く追加的な講義負担をしているのと同じであって、これ以上の学生引き受けは無理である。これでは効率的な指導教員の配置はできない。また、本務とはいえ、JTWコーディネーターが、ISP謝金は一切支払われないまま、多くの人数の指導を引き受けているのも当然とは言えない。もちろん、自分で指導せずに指導教員を探せばいいのではないかと思われよう。しかし、信頼して指導を任せられる教員の数に限りがあり、他方、問題意識が曖昧で不定形の研究テーマを漠然と希望する学生が多い現状では、危機管理上、コーディネーターがまとまった人数を抱え込むほかないのである。この点から見ても、現在のJTWの規模はすでに過大と言える。

さらに施設の問題がある。仮に専任の増加と全学の協力を実現したとしても、現在の留学生センターの施設規模では規模拡大に必要な改革は実現できない。現在、JTWは、火曜～金曜の2限、3限、1つの小教室を優先的に使用できるにすぎない。2限～5限にかけて、常時、少なくとも2教室をJTWの講義およびゼミのために使用できるようにするべきである。

## 5 終わりに

以上、JTWの現状と課題につき、整理と考察を行った。JTWの規模拡大とともに必要となる改革方向について、やや踏み込んだ提案を行ったが、すべて筆者の見解である。

### 【参考文献】

今井亮一 (2006) 「JTW program 2002-2005」、九州大学留学生センター紀要・第14号、67-77。

九州大学留学生センター (2001) 『自己点検・評価報告書』、非売品。残部なし。

Pollack, Jordan (2007), "Building Competency through Study Abroad-The JTW Experience," 九州大学留学生センター紀要・第15号、155-173。

## 2006年度 九州大学留学生センター留学生指導部門報告

スカリー 悦子\*

白土 悟\*\*

高松 里\*\*

### 1. はじめに

留学生指導部門の2006年度の活動を報告する。

留学生指導部門の中心的な活動は、「相談活動」であり、本年度も3つのキャンパス、2つの国際交流会館（留学生専用宿舎）に相談室を設けた。3つのキャンパスとは、箱崎キャンパス、六本松キャンパス、伊都キャンパス（新キャンパス）である。

箱崎キャンパスは、工学部・府が伊都キャンパスに移動したため、留学生の数は減ったものの、多くの学部・府があり、留学生指導や日本語教育の拠点となっている。

六本松キャンパスは、学部1年生2年生対象の全学教育が行われ、また比較社会文化学府があるが、2009年春には新キャンパスに移行する予定である。週1回相談日を設けた。

伊都キャンパスは、2005年10月に開校し、その後工学部・府が徐々に移動して行った。当初は食堂や喫茶店も不備であり、学生の居場所がない、などの問題があったが、徐々に改善されつつある。また宿舎としては、「伊都ドミトリ」が1棟建設され、2棟目の建設も進められている。伊都キャンパスにも相談室を設け、週2回の相談体制を取っている。

これらの相談活動は、基本的には留学生を対象としているが、それだけではない。留学生が在籍している研究室の教職員や、留学生の友人やチューターなど、留学生に関係する人々（主に日本人）に対して、様々なコンサルテーションを行っている。

また、留学生指導部門は、これらの相談活動の他、全学教育において留学生を主な対象（日本人も受講可能）とした総合科目「日本事情」の他、少人数セミナーを開講した。また人間環境学府（大学院）においても、いくつかの留学生関連科目を開講した。その他、留学生センター所属の留学生（日本語研修コース、日韓共同理工系学部留学生予備教育コース）などに対しても、日本事情等の授業を行った。

さらに、異文化で暮らす留学生が重大な問題を抱える前に、予備的な教育を行うことを目的として、「新入生オリエンテーション」「チューターオリエンテーション」などでレクチャーを行う他、入学直

---

\*九州大学留学生センター教授

\*\*九州大学留学生センター准教授

後の学生に対する初期適応支援活動なども幅広く展開している。

また、九州大学留学生会、九州大学ムスリム学生会、九州大学国際親善会などの国際交流団体の顧問を筆者らが引き受け、交流活動について様々なアドバイスを行っている。

その他、研究活動・地域連携活動などについても、本年度も引き続き積極的に行われた。

## 2. 相談活動

### (1) 相談室および担当者

九州大学は、箱崎キャンパス、病院（馬出）キャンパス、筑紫キャンパス、六本松キャンパス、大橋キャンパス（元芸術工科大学）、別府キャンパスに分散しており、2005年10からはさらに伊都キャンパスが開校した。

留学生センターは、センターのある箱崎キャンパス、全学教育が行われている六本松キャンパスで相談室を開いてきた。2005年10月から伊都キャンパスにおいても相談室（巡回相談、週2回）を開設した。将来的には伊都キャンパスに大部分が移転することになっており、伊都キャンパスの留学生数も徐々に増えていく。

また、留学生宿舎として、従来から九州大学国際交流会館（東区香椎浜、270室）があったが、2003年に九州芸術工科大学と九州大学は統合し、博多区井尻の国際交流会館（90室）の留学生も、留学生センターの支援対象に加わった。ただし、相談室は香椎浜の会館のみに設置されている。また、留学生専用宿舎ではないが、伊都キャンパスには「ドミトリー」が建設され、その一部は留学生専用階となっている。

これらのキャンパスや宿舎に対して、指導部門の3人の教員はそれぞれ分担して相談活動を行った。箱崎キャンパスには留学生センター分室があり、ここには3人の教員室がある。そのため、活動の中心は箱崎キャンパスとなっているが、六本松と伊都は白土と高松が、香椎と井尻の宿舎はスカリーが主に担当した。

### (2) 相談状況

相談室における相談件数は表1の通りである。ここでいう相談件数には、数分で済むような簡単な情報提供は含まれていない。

相談件数は、936件（延べ数）となり、昨年度（2005年度）の525件に比較して、倍近くの数になっている。

「留学生からの相談」でもっと件数が多いのは、「宿舎問題」の194件である。この多くは国際交流会館関連のものである。留学生数が増加し、入居希望者が増えるに伴い、会館での入居期間は短縮されつつある。以前であれば、1年間入居できる学生が多くいたが、現在ではほぼ6ヶ月になってきている。このため、部屋への入・退去の相談の他、新しいアパートを捜すことなどについても相談が増えた。また会館サポーター（留学生と日本人学生）からの相談あるいはサポーターに対するコンサルテーションの機会が増えた。「生活問題」とは、日常生活上の諸問題（ゴミの出し方等）、妊娠や出産

表1 2006年度相談件数

留学生からの相談			その他の外国人からの相談			
		件数			件数	
修学	入学・進学関係	43		入進学	11	
	教育制度・内容	39		その他	23	
	進路相談	20		小計	34	
生活	法律的問題	8		日本人からの相談		
	経済的問題	18		学生	留学生とのトラブル	0
	宗教的問題	25			国際親善会関係	32
	宿舍問題	194			その他	33
	生活問題	72		教職員	入進学	5
	事故病気等	4			奨学金	2
	渡日・滞日許可	1			日本語関係	
	人間関係	27			その他	60
	子弟の教育問題	0		外部	情報・コメント	51
	帰国準備	6			イベント・講師依頼	56
	精神的不安定	12			入進学	9
	国保・一般保険	3			苦情	1
	その他	各留学生会	65			その他
その他分類不可		80		小計	285	
	小計	617		総計	936	

に関わる問題などである。「人間関係」は、研究室での教職員や同僚の学生との関係についての相談が多かった。「各留学生会」とは、主に九州大学留学生会と九州大学ムスリム学生会関係であるが、ムスリム学生会が積極的に講演会などを開き、地域住民との交流を図ろうとしていたため、それに関する相談が多かった。

「その他の外国人からの相談」とは、九州大学の留学生ではないが、これから九州大学を受験する外国人や、訪問研究員などからの相談の数である。

「日本人からの相談」であるが、「学生」に関しては九州大学国際親善会の学生からの相談が多い。この会は最近会員数が増え、活動も量・質ともに増えている。そのため、様々な国際交流活動についての相談が多かった（日本人からの相談に分類しているが、実際には、この会には留学生も少なからず存在している）。

「教職員」は、留学生の勉学や研究室での適応に関するコンサルテーションが多かった。その他、外部団体（国際交流関係団体、警察、マスコミ等）からの情報提供依頼やイベントの講師依頼なども多かった。

### 3. 予防的・教育的活動

#### (1) オリエンテーション

例年通り、4月と10月に、「新入留学生オリエンテーション」および「チューターオリエンテーション」(留学生課主催)が箱崎キャンパスで行われ、指導部門教員は適応問題等についての講演を行った。

また2005年度から始まった、六本松キャンパスにおける「新入留学生オリエンテーション」(学部学生向け)が本年度も実施された。この新入生オリエンテーションは、チューターオリエンテーションを兼ねており、留学生とそのチューターと一緒に参加したことが特徴である。

2006年4月に「留学生と友達になりたい日本人学生のための留学生超入門2006年版」を3500部印刷発行し、九州大学の入学式後のオリエンテーション等で配布した(高松)。

#### (2) チューター制度の改善

2005年4月から始めた、学部1年生を対象とした「チューター斡旋」は、その後も継続し、2006年度も同様に行われた。これは、学部1年生の留学生は、自分でチューターを見つけることは難しく、チューターが決まるのが5月以降になることが多かったためである。チューターが必要なのは入学直後であるため、留学生センター(高松)、六本松学生係、九州大学国際親善会が協力して、日本人学生(一部先輩留学生)のチューター希望者を登録し、斡旋するものである。また、上記のような新入留学生とチューターの両方を対象とするオリエンテーションを今年度も実施した。

また、従来チューターが何をしたら良いのか、必ずしも明確になっていなかった。そのため、チューターとなった学生もどこまで留学生に対して面倒を見たら良いかわからない、という状況にあった。あるチューターは新入生の来日日に空港まで迎えに行くし、あるチューターは1週間後ようやく留学生と会う、というような事態となり、留学生から「私のチューターは何もしてくれない」などの不満も聞こえた。

そこで、2006年4月の「チューターの手引き」(留学生課発行)において、チューターの役割として空港に迎えに行くことも含めて明記した。

また、国際交流会館では、「初期適応支援活動」を展開してきたが、2006年10月には、教職員の中で「チューターが来てくれるので特に支援は必要がない」という意見が出た。しかし、実際には、チューターと一緒に来た留学生もいたが、チューターとは連絡が取れずに一人で来た留学生もいた。また、チューターと一緒に来ても、チューターが会館周辺の情報(スーパーマーケット等)を知らなかったり、会館の使い方が分からない、などの問題が生じた。

(次期、2007年度報告で書く予定であるが、チューター問題については、これらの混乱を経た後、チューターオリエンテーションの内容も改善し、全体としてかなりスムーズに行われるようになった。また、初期適応支援活動は、その後、さらに充実して行った。)

## (3) 初期適応支援 (4月と10月)

本年度も、初期適応支援を行った。来日したばかりの留学生の多くは、国際交流会館(香椎浜と井尻の2カ所)に入居する。

24時間以上かけて来日する留学生もおり、疲れ切って会館に到着する。巨大な荷物を数個持つてくることがよくあり、荷物を部屋に運ぶだけでも重労働である。また食事をし、夜寝る道具(会館には備え付けの布団や枕はない)を確保しなくてはならない。さらに母国に連絡をしたいが国際電話やインターネットはどこで使えるのか、指導教員と会いたい大学までどうやって行ったらいいのか、など着いたばかりでまだ言葉もよくわからない留学生にとって、やらなければならないことは多い。

新入留学生への支援活動は、1993年から開始したもののだが、現在では九州大学国際親善会の学生がシフトを組んで、最初の1週間、毎日朝から夕方まで受付カウンターを作って対応している。

その他、「キャンパスツアー」や「天神(市内中心部)ツアー」なども実施し、留学生が適応しやすいように支援している。初期適応支援は主に高松が担当した。

上述したように、2006年10月の支援体制はやや混乱を生じた。改めて、チューターの役割と、会館で出迎える国際親善会学生の役割について再検討された。

## 前期

- ・ 4月1日(土)～4月7日(金)：新入生適応支援活動(高松担当)  
毎日、九州大学国際親善会学生を中心に、書類の書き方、部屋の使い方、買い物ツアー、などを実施。今回は土日も開館。
- ・ 4月4日(火)：チューターオリエンテーション(留学生課主催、高松)  
今年度から実施を早めた。チューターの出席率は良好。
- ・ 4月6日(木)：新入生歓迎花見(箱崎キャンパス、高松)
- ・ 4月7日(金)：新入留学生履修説明会(六本松、高松・スカリー)
- ・ 4月9日(日)：天神ツアー(そら主催、香椎浜国際交流会館より出発)
- ・ 4月12日(水)：井尻国際交流会館オリエンテーションおよび歓迎会(スカリー)
- ・ 4月13日(木)：香椎浜国際交流会館オリエンテーションおよび歓迎会(スカリー)
- ・ 4月13日(木)：新入生オリエンテーション(留学生課主催、高松・スカリー)
- ・ 4月20日(木)：新入生適応支援活動反省会(留学生センター分室にて、高松)
- ・ 4月26日(木)：新入生オリエンテーション(学部生対象、六本松、高松)

## 後期

- ・ 9月26日(火)：チューターオリエンテーション(留学生課主催)にて講演(高松・スカリー)
- ・ 9月29日(金)：受け入れオリエンテーション(香椎浜会館、高松)
- ・ 10月1日(日)～6日(金)：国際交流会館にて新入留学生への適応支援(スカリー、高松)
- ・ 10月11日(水)：新入留学生オリエンテーション(留学生課主催)にて講演(高松、スカリー)
- ・ 10月12日(木)：開講式(日本語研修生・日本語日本文化研修生・日韓共同理工系学部留学生予備教育)および日韓共同理工系学部留学生予備教育オリエンテーションに出席(スカリー、高松)

・10月14日(土)：香椎浜会館オリエンテーション (スカリー)

(4) 学生団体に対する顧問としての指導・助言

留学生指導部門の教員は以下のような留学生交流関係の学生サークルの顧問となっている。様々な活動や要望に対して助言を行った。

九州大学留学生会 (KUFSA=Kyushu University Foreign Student Association)

九大に所属する全留学生を代表する会である。

活動としては、4月に「スポンサーミーティング」(地域交流団体との年間行事打ち合わせ)を行い、バスハイク、スポーツ大会、年末の国際親善パーティなどを実施した。

九州大学ムスリム学生会 (KUMSA=Kyushu University Muslim Student Association)

ムスリム学生会は、九大に所属するイスラム教留学生の団体である。

従来、年2回程度「イスラムセミナー」を実施してきたが、今年度も5月1日に「イスラムセミナー」を実施。イスラム教やその文化についての講演を行った。また、10月7日に、イギリスのジャーナリストである、イヴォンヌ・リドリー氏を招待し、講演を行った(200名ほどの参加者)。さらに、2007年3月31日(土)に「イスラム料理フェスティバル」を実施した。日本人客約150名、イスラム学生約100名参加し、講演の後に、各国の料理を味わうという企画が行われた。こられの行事の前には、数週間にわたって、高松研究室で、九州大学国際親善会の学生や、ボランティア団体「そら」のメンバーも加わって準備を行っている。

また、伊都キャンパス(新キャンパス)にも30名ほどのムスリム学生がいるが、彼らは礼拝の場所がなく困っていた。そのためロビーや廊下の片隅で礼拝を行っていたが、目立つし通行の邪魔になる。そこで礼拝場所を探したのだが、会場確保のためには様々な委員会の許可が必要であり、そのためには相当な時間がかかることがわかった。そのため、暫定的に「留学生センターの教員からの依頼があった」という形で、吹き抜け部分のスペース(ウェスト4号館3階)を使用できるようにした。

また、レストランにおいては、食材表示がされているものの非常にわかりにくい。イスラム学生にとって、どの料理は食べることができるのかよくわからない。そのため、店長に申し入れてわかりやすいメニュー表を作ってもらうことにした。メニューを検討してみると、うどんの汁に味醂が使われるなど、ムスリム学生にとっては食べて良いものか悪いものか、微妙なメニューもあることがわかった。

九州大学国際親善会(KUIFA=Kyushu University International Friendship Association)

毎年の活動としては、2月の「受験生案内」、4月と10月の「新入留学生支援」、5月に行われるシンガポール大学との交換プログラムの「Inter Link FUKUOKA」、11月の「九大祭への出店」、毎週木曜日の「コーヒーアワー」などである。

今年度も、学部1年生(六本松地区)の新入留学生に日本人チューターを斡旋する活動を、留学生センター教員と学生サービス係職員と連携して実施した。(九州大学国際親善会の活動の詳細は、高松2006を参照)。

#### (5) ボランティア団体の指導・助言

##### 「福岡フレンドリークラブ」の活動への助言と講義

九州大学には家族同伴の留学生が約300人いる。300人近くの夫人たちやその子どもたちの生活支援が大きな課題になっている。福岡フレンドリークラブは地域の日本婦人で構成される団体であり、九州大学教員の夫人も参加している。留学生夫人との交流と支援を目的に、毎週水曜日に留学生センター分室にて活動している。

活動は、留学生夫人向けの日本語授業（12：30～14：20）および交流会（14：30～16：30）である。これらの活動を通じて親しくなった留学生夫人たちの生活上の相談にも応じている。毎年1回、ボランティア育成講座として指導部門教員（白土）が講義を行っている。

##### 「九州大学留学生サポートネットワーク そら」の活動への指導助言

そら は、社会人を中心としているが、他大学の学生も参加しているボランティア団体である。主な活動としては、従来から日本語会話パートナーを個別で行っていたが、2005年度から井尻国際交流会館において日本語クラスを運営するようになった。その他、引っ越しや運搬の手伝い、イベントの企画などを行っている。毎年8月に新人募集、9月に説明会と研修会を行い、10月からの新入生支援に向けて準備を行っている。

年1回の総会の他、月1回の定例会（木曜日午後7時～8時半）、作業ミーティング（その他の木曜日午後7時～8時半）を、留学生センター分室にて行っている。これらのミーティングには毎回高松が出席している。

#### (6) 地域との交流活動の推進

2006年

- ・ 4月26日：福岡フレンドリークラブ・バザー（分室、留学生約70名来室）
- ・ 4月29日（土）：留学生会スポンサー会議（国際ホール、白土）

2007年

- ・ 1月31日（水）：分室ミニバザー（福岡フレンドリークラブ主催）

### 5. 授 業

本年度は、全学教育（主に学部1～2年生を対象）8コマ、大学院3コマ、留学生センター1コマを担当した。その他、1回のみ担当した授業などもある。

#### (1) 全学教育における授業

[前期]

全学教育については3コマ開講。総合科目「日本事情（高松）」、少人数セミナー「異文化コミュニケーション（スカリー）」、少人数セミナー「留学生交流論（白土）」である。

少人数セミナーは、高等教育センターの要請により、昨年度まで実施していた「世界の中の日本

表2 担当授業 (2006年度)

	前 期	後 期
学 部	総合科目「日本事情」(水5限、高松) 少人数セミナー「留学生交流論」(月4限、白土) 少人数セミナー「異文化コミュニケーション」(火4限、スカリー) 総合科目「大学とは何か」(1回、白土)	総合科目「日本事情」(水1限、白土) 少人数セミナー「異文化適応の心理学」(火5限、高松)
大学院	「留学生教育政策論」(金6限、白土)	「留学生アドバイジング論」(集中、白土)「異文化適応論」(集中、高松)
留学生センター	日本語研修コース「日本事情」(1回、高松)	日本語研修コース「日本事情」(1回、高松) 日韓共同理工系学部留学生予備教育「日本事情」(木3限、スカリー・白土・高松)

(前後期1コマずつ)を中止し、代わり提供されたものである。留学生センター教員が提供する科目であるため、留学生教育に関係のある科目であるが、特に留学生に限定したのではなく、日本人学生も対象としている。

その他、6月28日に総合科目「大学とはなにか」講義(白土)を行った。

[後期]

全学教育については、2コマ開講。総合科目「日本事情(白土)」と少人数セミナー「異文化適応の心理学(高松)」である。

### (2) 大学院における授業

前期に、「留学生教育政策論(白土)」、後期に「異文化適応論(高松)」「留学生アドバイジング論(白土)」を開講した。これらは、人間環境学府(教育システム専攻)において開講されたもので、前期は金曜日6限、後期は集中講義で実施された。

- ・1月19日~21日(金・土・日):人間環境学府集中講義「留学生アドバイジング論」(白土)
- ・2月10日(土) 11日(日) 18日(日):人間環境学府集中講義「異文化適応論」(高松)

### (3) 留学生センターにおける授業

日本語研修コース(半年間集中日本語)の学生に対して、前期と後期に1回ずつ、「日本事情」を行った(高松)。この授業は、日本人学生をゲストとして招き、実際に話をしてもらうというものである。

また、日韓理工系学部留学生予備教育コースの学生に対して、後期に週1回の「日本事情」を開講した。日本の文化・習慣およびカルチャーショックについての講義、日本人学生を交えて入学後の生活について話し合った(スカリー、白土、高松)

## 6. 研究活動

### (1) 著書論文

- ・横田雅弘、坪井健、白土悟、太田浩、工藤和宏共著『岐路に立つ日本の大学 - 全国四年制大学の国際化と留学交流に関する調査報告』(平成15 - 17年度科研報告書) 2006年9月1-211頁
- ・白土悟(翻訳、あとがき)「タラ・ニディ・バツライ: ネパールの帰国留学生からのメッセージ」日本学生支援機構編『留学交流: ぎょうせい、2007年2月、26-29頁
- ・白土悟「中国の中央政府及び民族自治州政府における留学派遣政策の考察」『九州大学留学生センター紀要』第15号、2007年2月、1-39頁
- ・白土悟「地域における留学生交流」鹿屋体育大学留学生シンポジウム報告書、2007年3月、6-11頁
- ・白土悟「異文化間教育学の構想論の検討」『異文化間教育に関する横断的研究 - 共通のパラダイムを求めて』(平成16~18年度科研報告書) 2007年3月、112-129頁
- ・高松里「留学生と地域社会 - 留学生相談室での経験から」自治体国際化フォーラム、66号、2006年6月、16-18.
- ・高松里「地域継続型グループ『月曜会』の24年」(分担執筆、現代のエスプリ別冊、野島一彦編集「臨床心理地域援助研究セミナー」至文堂)、2006年11月、259-268.
- ・高松里「巻頭座談会: 臨床心理地域援助の現状と課題」(分担執筆、現代のエスプリ別冊、野島一彦編集「臨床心理地域援助研究セミナー」至文堂)、2006年11月、9-33.
- ・高松里「国際交流学生サークル活動への教育的サポート - 「九州大学国際親善会」の活動と会への支援 - 」『九州大学留学生センター紀要』第15号、2007年2月、67-74.

### (2) 科研費助成研究

- ・平成16・17・18年度文部科学省科研「異文化間教育の横断的研究」(白土、研究分担者)

### (3) 学会活動

- ・6月2・3・4日: 異文化間教育学会 (関西大学、白土)
- ・7月14日(金): N.Fukuoka, M.Hatase, Y.Sakaki, M.Shimizu, M.Shimoda, S.Takamatsu & M.Mikuni 「Our nine years experiences of multi-cultural encounter group in Japan.」PCE2006 7th World Conference for Person-Centered and Experiential Psychotherapy and Counseling, Program & Abstracts, 50-51. July 12-16, 2006 in Potsdam, Germany
- ・7月14日(金): N.Yoshikawa, T.Hirai, S.Yamashita, S.Takamatsu & S.Murayama 「What can person-centered approach possibly do for world peace?-Conveying the message from the okinawan survivors wishing for peace to the world」PCE2006 7th World Conference for Person-Centered and Experiential Psychotherapy and Counseling, Program & Abstracts, 54. July 12-16, 2006 in Potsdam, Germany
- ・9月15日(金): 日本心理臨床学会にてワークショップ講師「サポート・グループとセルフヘルプ・

グループ」(高松、関西大学)

- ・ 9月16日(土)：日本心理臨床学会にて自主シンポジウム「サポート・グループと現在と可能性」企画(高松、関西大学)
- ・ 11月4日(土)：村久保雅孝・高松里・井内かおる・吉川麻衣子・都能美智代「エンカウンター・グループの新しい志向の実践」日本人間性心理学会第25回大会プログラム・発表論文集、75-76

#### (4) 研究活動

##### 【2006年】

- ・ 5月12日(金)～15日(月)：沖縄エンカウンター・グループ(人間性心理学会助成事業、高松)
- ・ 毎月1回(金曜日19:00～21:00)：多文化間カウンセリング研究会(九大、主催：高松)
- ・ 7月1日(土)：JAFSA 月例研究会にて講演「九州大学における国際交流学生サークル活動への教育的サポート」(北海道大学、高松)
- ・ 7月30日・8月1日：科研会議(於：大阪、白土)
- ・ 8月2/3/4日：JAFSAサマーセミナーにて共同講義(白土)「岐路に立つ日本の留学生政策と大学の国際化施策を考える」
- ・ 10月16日(月)：人環 P&P 打ち合わせ(白土)
- ・ 10月28・29日(土・日)：科研会議「異文化間教育研究における横断的研究」(於：九州大学、白土)
- ・ 11月18・19日(土・日)：科研会議(於：龍谷大学、白土)
- ・ 11月24・25・26日(金・土・日)：JAFSA 留学生担当者研修(於：一橋大学、白土)
- ・ 12月16日(土)九州留学生問題フォーラム講演会(白土、司会) JASSO 九州支部長・鎌田氏「JASSO の取り組む留学生支援について」
- ・ 12月23日(土)～27日(水)：「九重エンカウンター・グループ」(高松)

##### 【2007年】

- ・ 1月6日(土)～8日(月)：人間関係研究会スタッフミーティング(京都、高松)
- ・ 2月3日(土)：九州臨床心理学会自主シンポジウム「援助専門職とセルフヘルプグループ」シンポジスト(唐津、高松)
- ・ 2月15・16日(木・金)文科省先導的の大学改革推進委託研究「日本の大学における将来の留学生交流の見通し及び戦略に関する調査研究」(東京、白土)
- ・ 3月17・18日(土、日)：先導的の大学改革推進委託研究会議(一橋大学、白土)

## 7. 社会連携

##### 【2006年】

- ・ 4月2日(日)：福岡大学新入留学生講演会(高松)
- ・ 4月20日(木)：東警察署協議会(委員、白土)
- ・ 6月9・10日 市民セミナー(福岡国際交流協会助成、後援：福岡市・福岡県・福岡市教育委員会、

白土。高松は10日のみ)

- ・ 6月14日(水) 福岡市東区保健福祉センターの川口理恵氏を講師に招いて、留学生および夫人たちに「梅雨時の食物管理」を講演して頂く。
- ・ 6月24日(土)：九州英数学館国際言語学院にてワークショップ担当「学生が抱える問題にどう対応したらいいのかみんなで考えてみませんか？」(高松、福岡市)
- ・ 9月4日(月)：東警察署協議会：飲酒運転撲滅集会(白土)
- ・ 9月16日(土)：九州留学生問題フォーラム：留学生見学会、講演会、シンポジウム(白土、於：九州国立博物館)
- ・ 9月21日(木)：東警察署協議会(白土、於：東警察署)
- ・ 9月29日・30日(金・土)：鹿屋体育大学・留学生シンポジウム 基調講演「地域における留学生交流」(白土)
- ・ 10月18日(水)：福岡フレンドリークラブの後期スケジュール打ち合わせ(白土)
- ・ 10月19日(木)：福岡県商工部「留学生就職セミナー」相談コーナー打ち合わせ(白土)
- ・ 10月19日(木)：福岡帰国留学生交流会の打ち合わせ(白土)
- ・ 10月20日(金)：九州留学生問題フォーラムの留学生支援行事報告打ち合わせ(白土)
- ・ 10月20日(金)：講演「セルフヘルプ・グループ組織化支援と会運営支援の視点と手法」(平成18年度セルフヘルプ研修会、神戸市、高松)
- ・ 10月23日(月)：講演「外国人留学生から見た日本の社会と人権 - 多文化間カウンセリングの視点から -」(第27回人権・同和問題企業啓発講座、大阪、高松)
- ・ 10月21日(土)：JAFSA 中上級者研修会の実施打ち合わせ(白土)
- ・ 10月23日(月)：日本学生支援機構：月刊「留学交流」について相談(白土)
- ・ 11月14日(火)：JASSO 留学情報センター月刊「留学交流」打ち合わせ(白土)
- ・ 11月15日(水)：佐賀大学保健学科にて講演(高松)
- ・ 11月17日(金)：JASSO 九州支部講演の件打ち合わせ(白土)
- ・ 11月18日(土)：福岡キャリアカウンセリング協会にて講演(高松)
- ・ 11月21日(火)：立命館大学アジア太平洋大学学生相談室相談員に対するスーパービジョン(高松)
- ・ 11月21日(火)：福岡帰国留学生交流会の打ち合わせ会合(白土)
- ・ 12月22日(金)：国際教育クリエーションズと打ち合わせ(白土)
- ・ 12月22日(金)：福岡フレンドリークラブと打ち合わせ(白土)

#### 【2007年】

- ・ 1月15日(月)：国際教育クリエーションズとセミナー打ち合わせ(白土)
- ・ 1月19日(金)：福岡帰国留学生交流会の打ち合わせ(白土)
- ・ 1月25日(木)～27日(土)：関西大学大学院集中講義「地域実践心理学研究」(大阪、高松)
- ・ 2月14日(水)：太宰府天満宮崇敬会と「留学生の観桜会」打ち合わせ
- ・ 2月14日(水)：国際教育クリエーションズと4月市民セミナー打ち合わせ(白土)

- ・ 2月17日(土)：福岡帰国留学生交流会総会 (白土)
- ・ 2月21日(水)：九州留学生問題フォーラム事務局会議 (白土)
- ・ 2月28日(水)：福岡フレンドリークラブ報告会 (白土)
- ・ 3月7日(水)～9日(金)：香川大学学生セミナー (香川、高松)
- ・ 3月12日(月)：国際教育クリエーションズとセミナー打ち合わせ会議 (白土)
- ・ 3月22日(木)：福岡フレンドリークラブ報告 (白土)
- ・ 3月23日(金)：JAFSA 理事会 (メール、白土)

### (3) 学外からの来訪者

[2006年]

- ・ 6月7日(水)：一橋大学留学生センター 横田雅弘先生
- ・ 6月26日(月)：新潟大学 国際センター長 阿波村稔先生
- ・ 11月9日(木)：渡辺留美氏 (大阪大学国際化強化事業本部：本学国際交流室との情報交換のため来学)
- ・ 11月17日(金)：蘇氏夫妻 (台湾中興大学：本学農学部との交流協定締結のため来学)
- ・ 11月17日(金)：ケイ・トーマス氏 (ミネソタ大学国際交流部長、元 NAFSA 会長) と情報交換